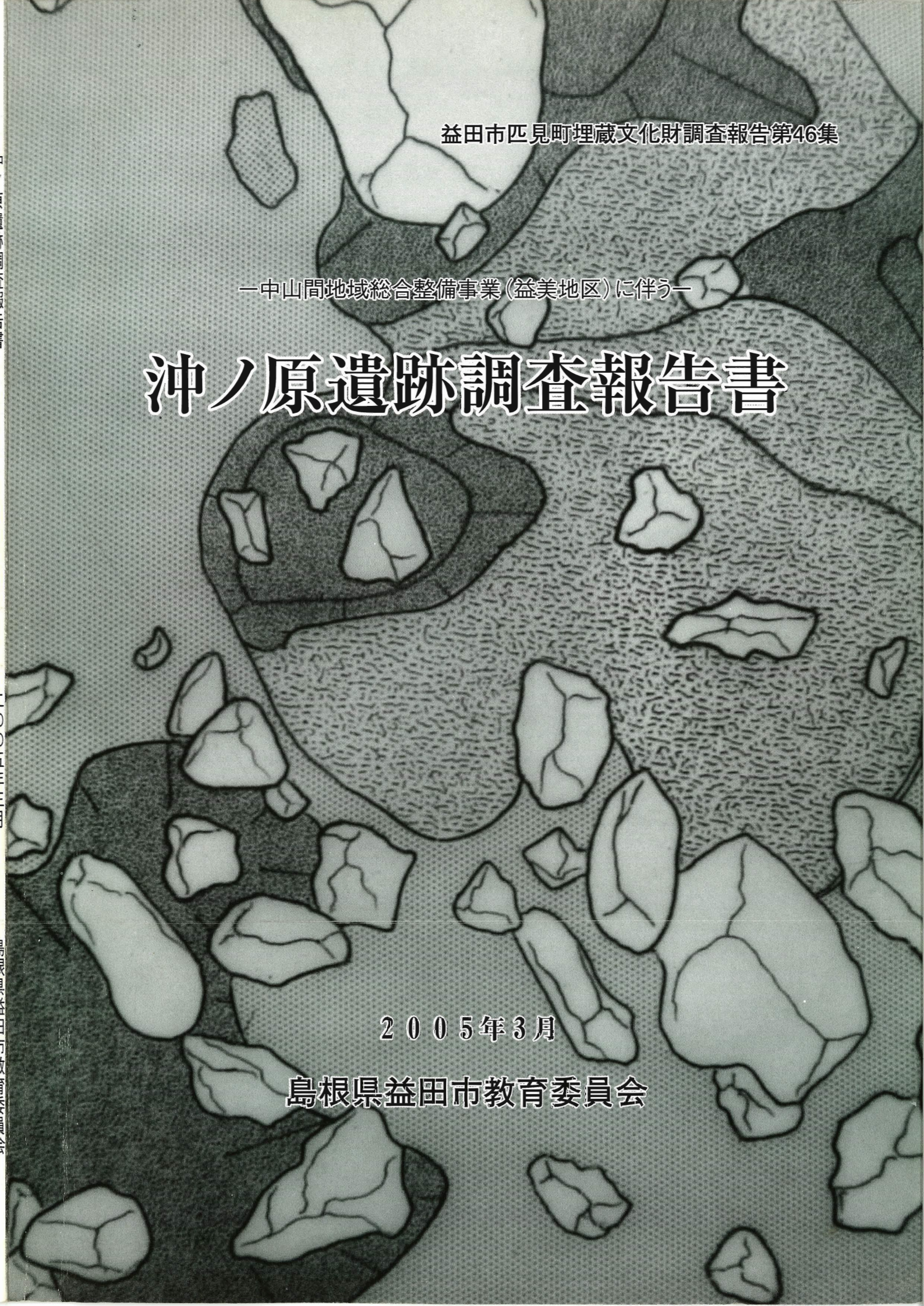


益田市匹見町埋蔵文化財調査報告第46集

―中山間地域総合整備事業（益美地区）に伴う―

沖ノ原遺跡調査報告書

２００５年３月

島根県益田市教育委員会

益田市匹見町埋蔵文化財調査報告第46集

ー中山間地域総合整備事業（益美地区）に伴うー

沖ノ原遺跡調査報告書

２００５年３月

島根県益田市教育委員会

例　　言

1．本書は、島根県益田農林振興センターの委託を受けて、匹見町教育委員会が平成15年度に行った中山間地域総合整備事業(広域連携型)益美地区事業に伴う、沖ノ原遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、次のような体制で実施した。

調査主体	匹見町教育委員会（平成16年11月1日から益田市教育委員会）	
調　査　員	匹見町文化財保護専門員	
	（益田市教育委員会 文化振興課 埋蔵文化財調査専門員）	
		渡　辺　友千代
調　査　員	匹見町教育委員会主任主事	
	（益田市教育委員会 文化振興課 主任主事	山　本　浩　之
調査補助員	匹見町埋蔵文化財調査室	
	（益田市埋蔵文化財匹見調査室）	栗　田　美　文
調査協力員	匹見町埋蔵文化財調査室	
	（益田市埋蔵文化財匹見調査室）	大　賀　幸　恵
		大　谷　真　弓
調査指導員	島根県教育委員会文化財課	伊　藤　徳　広
	山口大学人文学部教授	中　村　友　博
	島根大学法文学部助教授	山　田　康　弘
事　務　局		
	匹見町教育委員会教育長	松　本　隆　敏
	（平成16年10月31日まで）	
	匹見町教育委員会次長	大　谷　良　樹
	（平成16年３月31日まで）	
	匹見町教育委員会次長	渡　辺　健　一
	（平成16年４月１日から）	
	益田市教育委員会 文化振興課長	安　達　正　美
	（平成16年11月１日から）	
	益田市教育委員会 文化振興課　文化財係長	木　原　　光
	益田市教育委員会 文化振興課 主任主事	山　本　浩　之
発掘作業員	栗田　修　　斎藤　幸夫　　藤井　一美　　田中　莫	
	大舘　高義　　森　伊佐男　　宮市　勇　　平谷　吾郎	
	中間昭二郎　　渡辺婦友子　　吉原　延子　　岡本　奈緒	

遺物整理員　渡辺　聡　岡本　奈緒　籾田　睦美　藤井　美樹
大賀　幸恵　大谷　真弓　上原　弓子

3．調査に際しては、島根県益田農林振興センターの堀野係長をはじめ、島根県教育委員会文化財課に終始多大な協力をいただき、また山口大学人文学部の中村友博教授など、一方ならぬご教示を得たことに対し、ここに合せて謝意を表したい。

なお、発掘現場においては、土地所有者をはじめ、また地元の方々に終始多大な協力を得て、ここに報告することができたことに対してもお礼を申し上げたい。

4．今回の調査において、柱穴遺構－Ｐ、土坑状遺構－ＳＫ、住居址―ＳＩと略号している。なお、現場あるいは編集に掲示した図面は、美濃郡匹見町土地改良区の協力を得た1／1000の縮尺のものであり、また位置図などは縮尺1／25000を使用したものである。

5．調査地点の所在地については、調査時に鑑みて旧住所で標記した。なお、出土した遺物または該当関係についての資料は益田市埋蔵文化財匹見調査室で保管している。

6．編集にあたっては、前掲の調査員・調査補助員らの協力を得て、執筆・編集は渡辺が行った。

目　　次

第１章　発掘調査に至る経緯と経過 …… 渡　辺 …… 1
　第１節　発掘調査に至る経緯 …… 1
　第２節　発掘調査の経過 …… 1

第２章　地区の概況 …… 渡　辺 …… 2
　第１節　地勢 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 3

第３章　調査概要 …… 渡　辺 …… 5
　第１節　はじめに …… 5
　　１．地点域の立地 …… 5
　　２．調査にあたって …… 5
　第２節　調査区の設定 …… 5
　　１．調査区の設定にあたって …… 5
　　２．調査区の実測 …… 5
　第３節　層序と文化包含層 …… 7
　　１．層序の堆積状況 …… 7
　　２．層序と遺物・遺構包含層 …… 8
　第４節　検出遺構 …… 11
　　１．はじめに …… 12
　　２．検出の遺構の概要 …… 12

第４章　出土遺物 …… 渡　辺 …… 15
　第１節　はじめに …… 15
　　１．遺物の採り上げについて …… 15
　　２．出土遺物の分布と傾向 …… 15
　第２節　実測遺物 …… 16
　　１．実測土器 …… 16
　　２．実測石器 …… 21

挿図・図表目次

第１図　遺跡位置図 …… 1
第２図　遺跡位置と地区の遺跡分布図 …… 2
第３図　遺跡周辺の地形断面図 …… 3
第４図　調査区配置図 …… 6
第５図　下流地区土層図 …… 7
第６図　中流地区土層図 …… 8
第７図　上流地区土層図 …… 8
第８図　３地区（下流・中流・上流）の遺構概要図 …… 9～10
第９図　下流地区の各種の遺構図 …… 11
第10図　下流地区の焼土関係出土状況図 …… 13
第11図　土器実測図（１） …… 17
第12図　土器実測図（２） …… 19
第13図　土器実測図（３） …… 20
第14図　土器実測図（４） …… 21
第15図　石器実測図（１） …… 22
第16図　石器実測図（２） …… 23

第１表　遺構計測表 …… 12
第２表　出土遺物集計表 …… 16

図 版 目 次

図版１

鳥瞰からの遺跡とその周辺風景

図版２

１．匹見川の対岸からみた調査地点(北東から)　２．上流側からみた調査地点（東から）
３．下流地区の土層堆積状況(B区北北西ベルト)　４．下流地区の土層堆積状況（C区西南西壁）
５．中流地区の南北トレンチ北辺の土層堆積状況(南壁)　６．上流地区のＢ区の土層堆積状況（西壁）

図版３

１．下流地区の出土分布状況　２．縄文土器片の出土状況（下流地区）
３．局部磨製石斧の出土状況（中流地区）　４．打製石斧の出土状況（上流地区）
５．下流地区のA区の遺構表出状況（東から）　６．下流地区のB･C区の遺構表出状況(南西から)

図版４

１．下流地区の焼土類の出土状況（西から）　２．SK15･SK17土坑の表出状況(下流地区B区)
３．集石土坑の表出状況（中流地区SK01）　４．北東から捉えたSK16土坑の半截状況(下流地区)
５．焼土が嵌入するSK15土坑の半截状況(下流地区)　６．ＳＫ24土坑の半截状況（下流地区Ｃ区）

図版５

１．ＳＫ27土坑の半截状況（下流地区）　２．下流地区の焼土類の完掘状況（南西から）
３．Ｂ・Ｃ区の遺構完掘状況（下流地区）　４．下流地区の完掘状況（東から）
５．中流地区の完掘状況（東から）　６．上流地区の完掘状況（東から）

図版６

１．実測土器類（１）　２．実測土器類（２）
３．実測土器類（３）　４．実測石器類（１）
５．実測石器類（２）　６．分布調査で出土した石冠

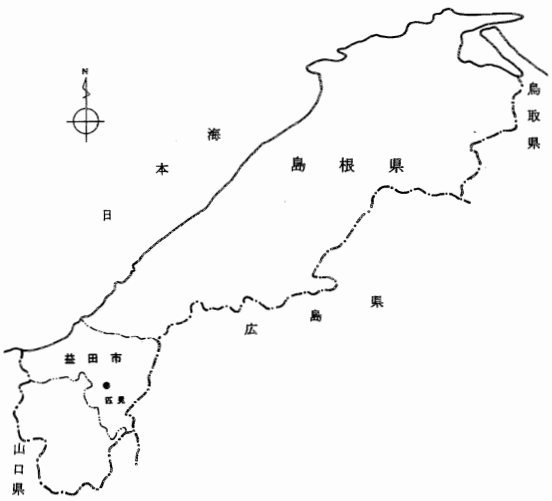
第１章　発掘調査に至る経緯と経過

第１節　発掘調査に至る経緯

益田農林振興センターから匹見町教育委員会に「益美地区県営中山間地域総合整備事業」（広瀬工区）計画の打診があったのは平成14年1月18日であった。そのおり口頭で、当該事業地区内には周知の遺跡が分布していることから、事前協議が必要である旨を伝えたのであった。

事前協議は同年3月29日に益田農林振興センターで行われ、実施設計は14年度、工事実施計画は同16年9月から17年12月の予定であることが示されたのであった。これを受け、受託者側の匹見町教育委員会は、14年度に該当地区の分布（試掘）調査を実施することを約束し、その調査結果に基づいて再度協議したい旨を伝えたのである。

分布（試掘）調査は、計画通り平成14年度に実施（匹見町埋蔵文化財報告書40集）し、その結果、周知の遺跡である沖ノ原遺跡周辺に縄文晩期を中心とした遺物が多量に包含していることが判った。とくに石冠の出土は本県でも希品であって、文化財保護対策の必要性を生じることになったのである。



第１図　遺跡位置図

第２節　発掘調査の経過

文化財保護の立場から協議したものの、工法上掘削せねばならない部分が半分以上もみうけられたので、最終的には記録保存ということに決定し、本格調査は平成15年10月2日から実施したのである。

まず、最初に手掛けたのは沖ノ原遺跡に隣接する地点から始めることにし、つぎに石垣築地で1段高い上流側を、そしてさらにその上流側というように、つまり3地区とに分断して行うことにしたのである。詳細については３・４章で報告しているとおりであるが、沖ノ原遺跡の隣接地の下流区では縄文晩期中心とした遺物が遺構とともに検出され、そして中・上流区とした地点では縄文後期というように、両地区に時期的差異が認められたのであった。遺物は、下流区を中心に多量であったものの、3地区とも全体的には数次のオーバーフローによる流下があったらしく、とくに中・上流区では撹乱を呈していて遺構の把握は難しいという状況であった。

平成15年10月29日には匹見小学校6年生による発掘体験を実施し、現場作業は平成16年1月9日に無事終了したのであった。そして同年2月9･10日の両日には、とくに出土遺物からの位置付けについて、山口大学の中村友博教授から指導を得るとともに、また島根県益田農林振興センターの三輪健也・安部正志技師の両氏には終始お世話になったことを記し、以上発掘調査に至る経緯と経過の報告としておきたい。

（渡　辺）

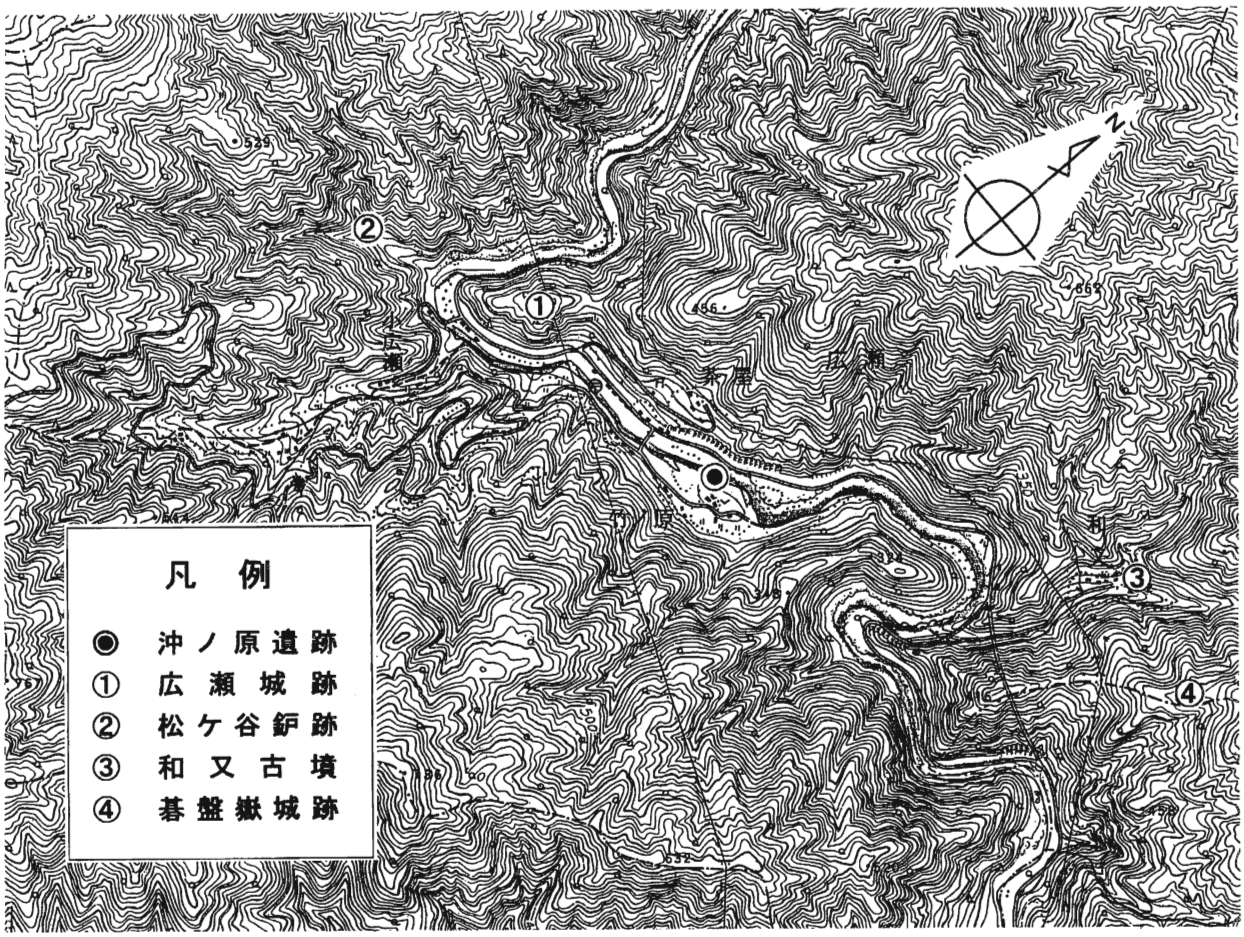
第２章　地区の概況

第１節　地　勢

該当地区は、匹見町域の7大字あるうちの広瀬という１つの大字地区にあたるが、さらに地区内は和又・茶屋・竹ノ原・小広瀬という字単位ごとに分かれていて、そこには小集落が形成されている。そして地区内を二分するかのように、蛇行しながらも凡そ東－西方向に匹見川が流下しているとともに、それに沿って陰陽を結ぶ国道488号線が通貫しているという景観下にある。

その広瀬地区は、低位部の流域で標高160～220ｍを測り、また高位部は874.3ｍの池ノ原山を最高とし、大半はこうした山地で占められていて、強いて谷平地といえば、本報告する沖ノ原遺跡が所在する竹ノ原地区に僅かにみるに過ぎないのである（第２図・図版１）。

こうした大半が山地という該地区の山地には、トチノキ・ホオノキ・クリ・サワグルミ・イヌシデ・アカマツなどのほか、とくにコナラ・ミズナラといった落葉ナラ帯に覆われているが、流域沿には照葉樹林のツバキ・カシ類も繁茂している。また、そういった山地にはタヌキ・キツネ・ウサギ・アナグマ・サル・イノシシ・ツキノワグマなどの動物が生息し、旧くはシカやオオカミもいたらしい。そして河谷にはハエ・ウグイ・アマゴ・アユ・ウナギなどの魚類も生息し、山地の資源は豊



第２図　遺跡位置と地区の遺跡分布図

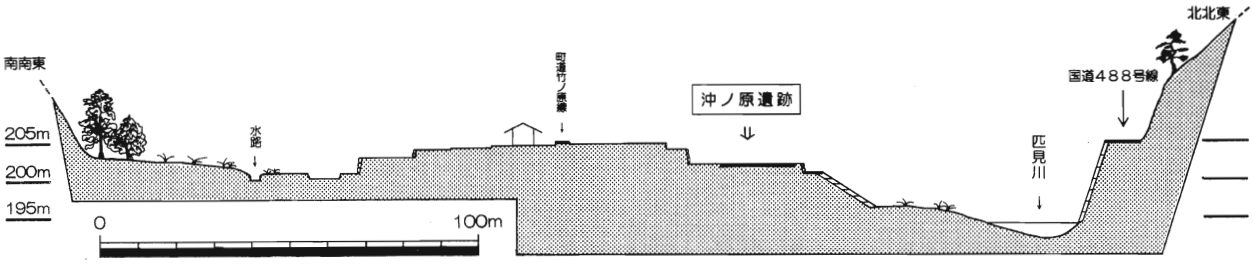
富な所であるため、一方ではその山林を活かした木材の搬出・製炭業などの山林業は昭和30年代

までは盛んであったのである。

第２節　歴史的環境

該地区は、明治22年から昭和30年までは匹見下村の1地区として、農林業を中心に活計されてきた。また近世から引き継がれてきた製紙業も盛んであったが大正末には途絶え、そして匹見町大字広瀬（平成16年10月31日まで）といわれている現在では、戸数40余りで、おもに土木関係の仕事に携わりながら、一方では農林業も支えるといった兼業がほとんどである。

近世期には焼畑が広く行なわれソバなどのを栽培、とくに当村のアユのウルカなどは浜田藩に上納されていたといい、明暦2年（1656）の村高は152石余り、戸数64とある（『角川日本地名大辞典―島根県』）。また茶屋の引越に祀られている大元神社は松ヶ平から移されたもの（大正12年）といい、安永年間（1772－80）以前には小広瀬の桐梨に鎮座していたものという。そして、寺院では近世初期の開山と伝えられている浄土真宗の龍雲山蓮長寺が今も都谷に存続している。



第３図　遺跡周辺の地形断面図

さて周知の遺跡であるが、近世期の鈩（たたら）跡が１箇所、中世の山城跡が2箇所、古墳であったといわれているものが1箇所、そして今回調査対象地とした竹ノ原地点での縄文遺跡である沖ノ原を含め計5箇所が分布している（第2図）。

このうち２箇所の山城跡は、匹見町域でしばしばみられる立地形態のもので、つまり匹見川が大きく半円状に周流して舌状を形成するその尾根筋に構築されているものである。広瀬城跡はその典型的なもので、在地の守備・防衛も然ることながら、どちらからといえば匹見の本郷（匹見町匹見）への進入を阻む、砦・狼烟台的な機能もった程度のものであったのではないかと思われる。また鈩跡が他地区に比べて1箇所というのも気になるところである。そして、和又社古墳から出土したという「唐鋤」（からすき）は旧くから注意されていたが、木下忠の「島根県匹見町広瀬出土の犁鑱（すきさき）の再検討」『考古論集―慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集―』において、諸事例を掲げて同犁鑱は「中世期のもの」と結論づけられて現在に至っているのである。確かに該遺跡を古墳としている『石見匹見町史』が、本当にそれが古墳であったかは今日では明らかにできるものではなく、また出土した遺物や和又杜といわれていることからみて、該地点域は中世期における葬地、あるいは祭祀地ではなかったかと想像している。現に、同地点域からは前田司氏による古備前の壷が、台石におかれたような様態で発見されていることなどからも、木下氏の説を補強することができるものと考えられ、該遺跡を古墳と断定できそうもないのである。

原始・古代遺跡は、今のところ縄文晩期の沖ノ原遺跡のみと貧弱である。勿論、開発等におけ

る調査が行なわれていなかったことも影響しているといえるが、他の地区に目を向けても１箇所というのは、極めて意外と云うほかないのが現況である。このことは山地と流域の比高差が激しく、しかも顕著な谷平地や河岸段丘が発達した場所がみられない、という地形的立地が最大の理由であったのではないかと考える。

（渡　辺）

第３章　調査概要

第１節　はじめに

１．地点域の立地

調査地点は、島根県美濃郡（現益田市）匹見町広瀬イ２２４－１番地ほかに所在し、字名を沖ノ原といわれている場所である（第１・２図）。

本地点域は、北西側を匹見川が西南西流する左河岸端にあたり、また反対の南東側にかけては緩やかに比高差約３ｍを測る丘陵が形成され、そしてその100m地点に至っては調査地点よりは低位となっていて、そこは旧河道であったことを窺わせる地形に立地している。つまり遺跡は中州状に形成された場所にあたっており（第３図）、ほとんどが水田の可耕地と化されているが、また７戸余りの民家も点在しているという環境下にある（図版２－１）。

２．調査にあたって

遺跡名を沖ノ原というのは、今回調査しようとする範囲域の西側を中心に呼称されているものであるが、これは周知の遺跡地をいうのである。ただし本命と思われる地点域は開発行為がおよぶ範囲でなかったため、その上流方向の北東側を中心に実施しようとするものであるものの、一部には沖ノ原という字名がみられることから、本名を引き継ぎ呼称することにした。

なお、調査対象地は水田で、周知遺跡に隣接する西の下流側の表面標高は約202m、上流の東側では約203mを測って、約１mの高低差があった。その対象範囲は平成14年度における分布調査で把握されていたものであったが、高低差とともに２段からなる石垣築地で仕切られていたので、３地区に分割して実施することにしたのである。

第２節　調査区の設定

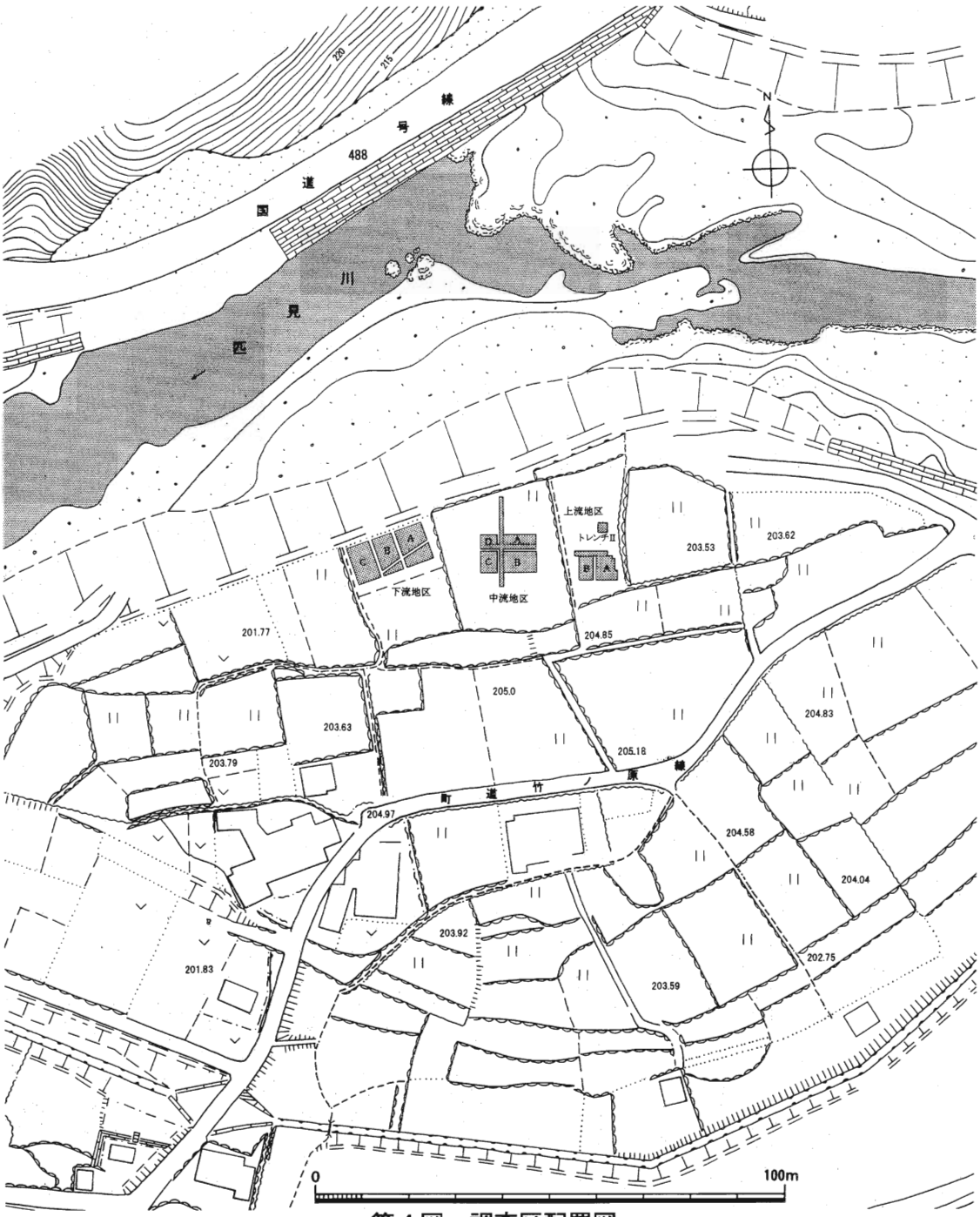
１．調査区の設定にあたって

調査区の設定にあたっては、平成14年度において遺物・遺構の出土の疎密・有無状況などが把握されていたので、それらや立地を考慮して任意に設定することにした。つまり、2段の石垣から形成された3枚の水田の対象地を、下流方向の西端のものを下流地区、そして東端のものを上流地区とし、その中間のものを中流地区とに地区分けした上で行うことにしたのであった。

２．調査区の実測

下流地区と称するものは、匹見川が西南西流しているが、その河岸端にあたる北々西端沿い（東北東－西南西方向）に16.5mのものを測り、そして対角（北々西－南々東方向）には８ｍを測った長方形のものを設けた。さらに下流地区と称した本地区の調査区のものは、凡そ3等分にしてベルトを設けるとともに、Ａ・Ｂ・Ｃという区名を付けたグリットを設けて実施することにした。なおベルトについては、そのほかに長形側へ斜行方向のものも設定したものも設けた（第4図・第8図）。中流地区と称するものは２段めの水田に設けたもので、分布調査（平成14年度）において

A調査区と称したものを含め、北－南方向に20mのトレンチ（幅１m）をまず設けたのである。そして西－東方向に12mのトレンチを遺物・遺構の出土状況をみて、これを北－南トレンチと交差するように設定して、その方向における範囲を確認するためのものを設けたのであった。その結果、遺物の出土状況から南－北方向に８m、西―東方向に12mを測る長方形のものを実測した上で、さらにそれをA～D区としグリットを設定したのであった（第4図）。



第４図　調査区配置図

さて、上流地区と称するものは、中流地区から８m東側の約40cm高い上流側に設けたもので、それは５m×９mのものとした（第４図）。ただしその後、遺物の状況から東端側へ不規則な拡張区と称する11㎡測るものを実測し、さらにA・Bとするグリットを設けたのである。

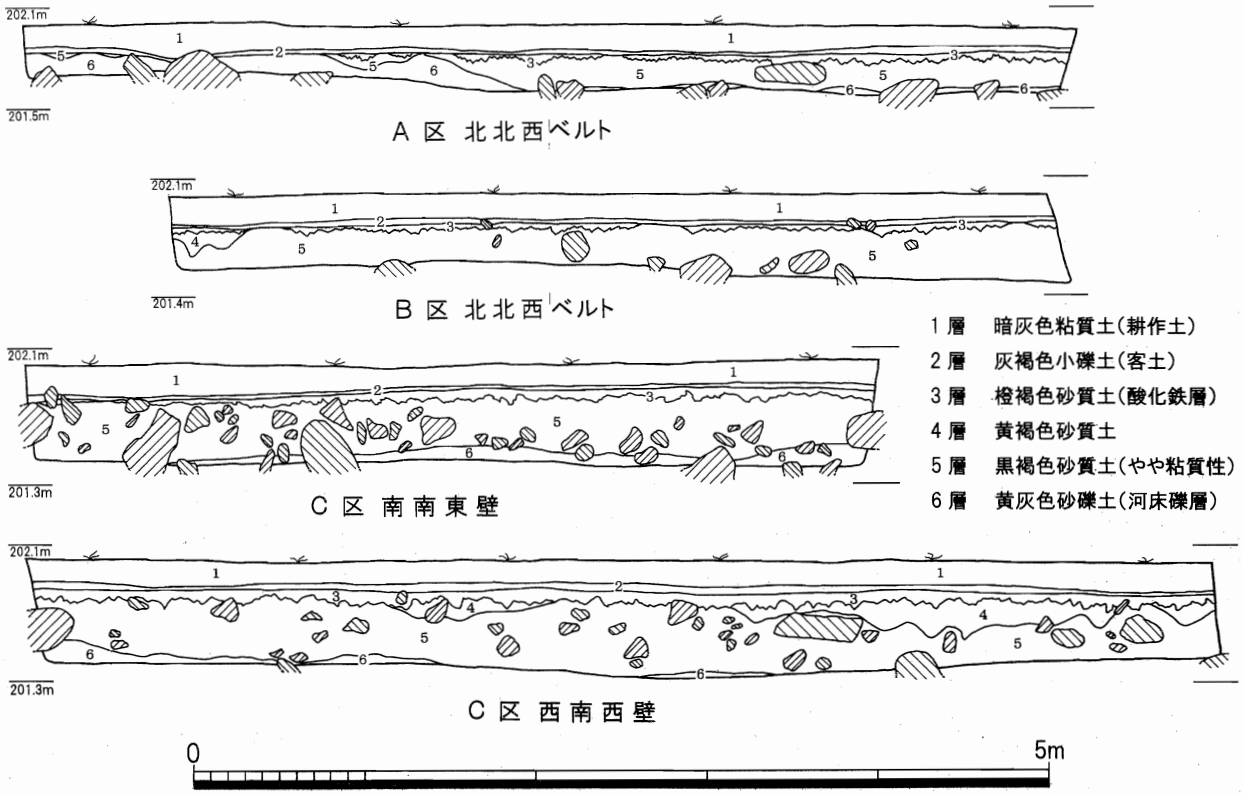
そのほか、４m北側にトレンチⅡと称する４㎡のものを設けたが、その調査区では遺物・遺構の検出はなかったので、本報告はしないことにした。

第３節　層序と文化包含層

１．層序の堆積状況

本遺跡における基本的層序は、1層の耕作土としての暗灰色粘質土、2層の客土である灰褐色小礫土、3層は酸化鉄の含浸による橙褐色砂質土、4層は黄褐色砂質土、5層は遺物包含層である黒褐色砂質土、6層は河床礫としての黄灰色砂礫土で、いわゆる地山という順に堆積していた（第5～7図・図版２－３～６）。

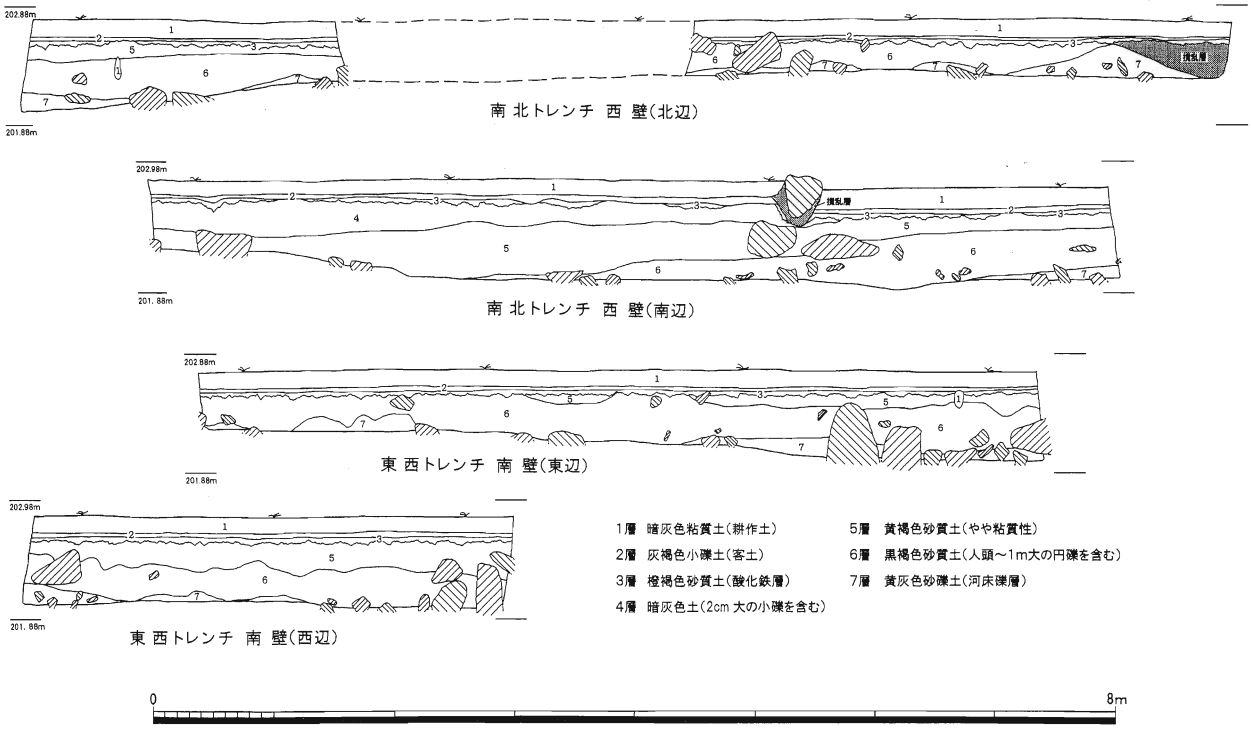
しかし中流地区の１区域（南北トレンチ）においては、下流地区でいう3層橙褐色砂質土と4層黄



第５図　下流地区土層図

褐色砂質土にあたる層間に暗灰色土が堆積し、他地区とは異にする。ただし本層は、当地区においても一部分に堆積しているにすぎないこと、そして尖滅していることなどからみて、極めて局限的な層位であったものとみられる（第6図）。ただ隣接する上流地区の4層においては、漸移的な灰色部分がみられることから、該当地区域の局限的堆積層であったものと捉えるとともに、したがって下流地区のものは立地状況からみて、該当層が失流したものと想定される（第5図）。

１・２層の後世の人為的層は別にして、これらのほとんどは砂質・砂礫的であり、匹見川に隣接した立地状況のもとに堆積した様子が窺われる層序であった。とくに円石は上位の黄褐色砂質層でもみられるとともに、比較的厚く堆積した黒褐色砂質土及び地山の黄灰色砂礫土に至っては、50cm以上のものが填充するといった状況であり（第５～７図・図版５－３～－６）、発掘調査に

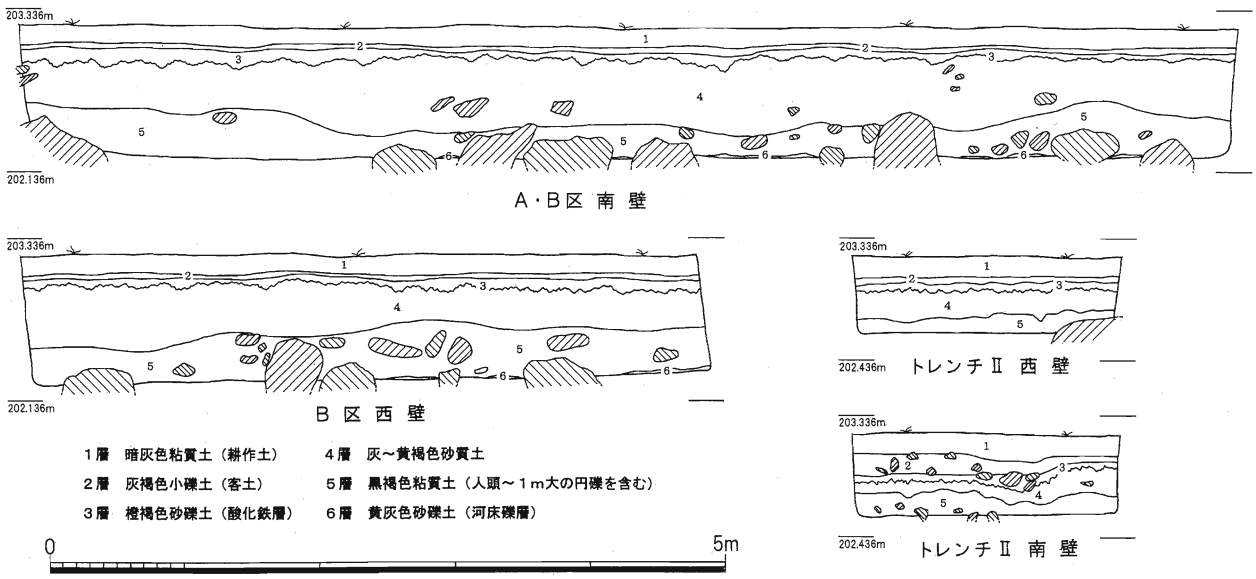


第６図　中流地区土層図

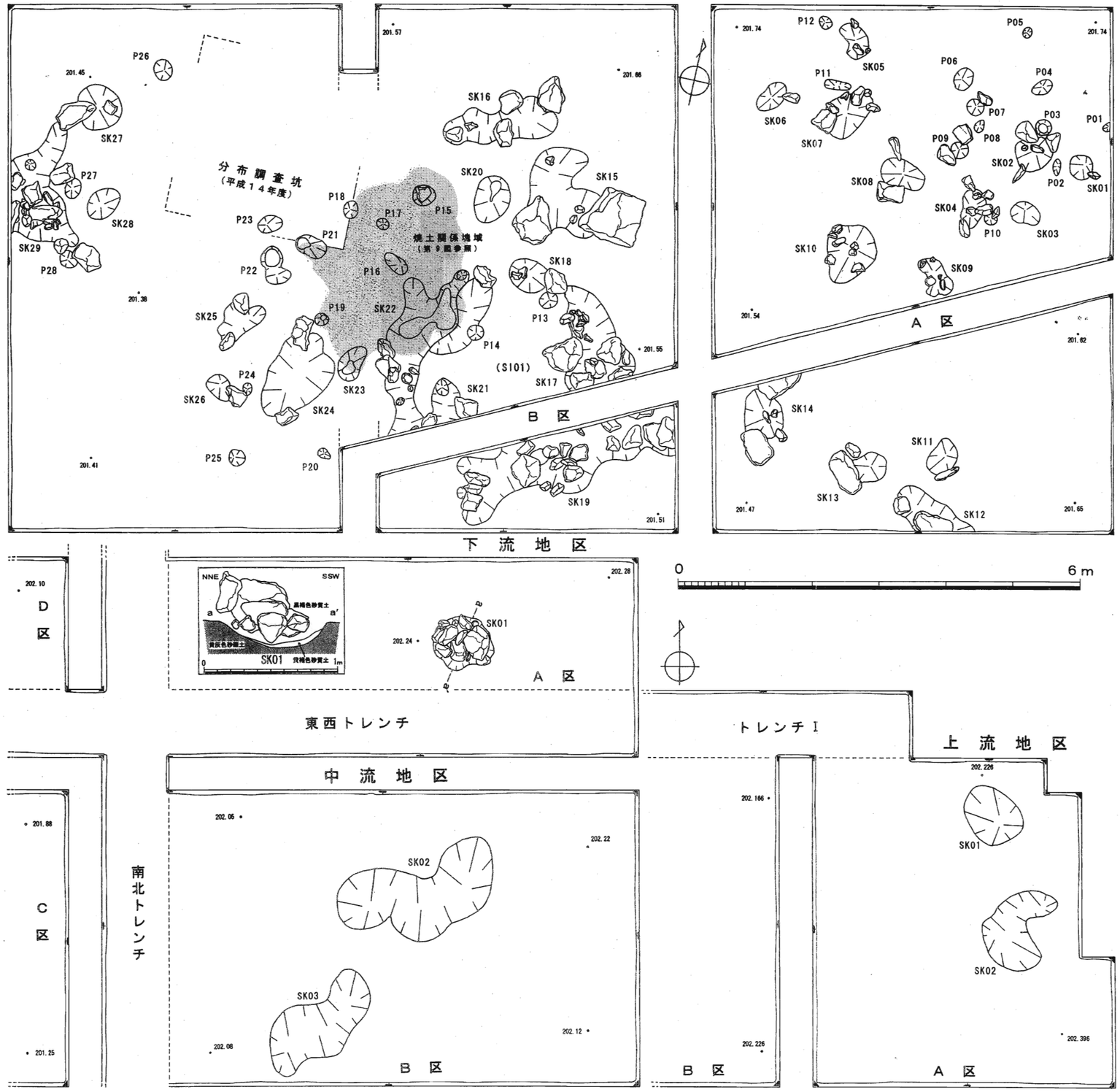
とっては隠当な堆積状況とはいえるものではなかったのである。

２．層序と遺物・遺構包含層

層序順は地区によっては異なるものの、縄文遺物の包含層は主に黒褐色砂質土（下・上流地区の５層、中流地区では６層）を中心に出土した（第2表・図版３－１～－４）。ただ本層を挟む上・下位層でも多少出土しているように認識したものもあるが、これは原位置のものであったのか、また採り上げの誤認によるものであった、かが疑問としてのこる。これは、匹見川が形成したといってよい撹乱的堆積層序を呈していた状況であったことからみて、後者の可能性が強い。また中世陶磁



第７図　上流地区土層図

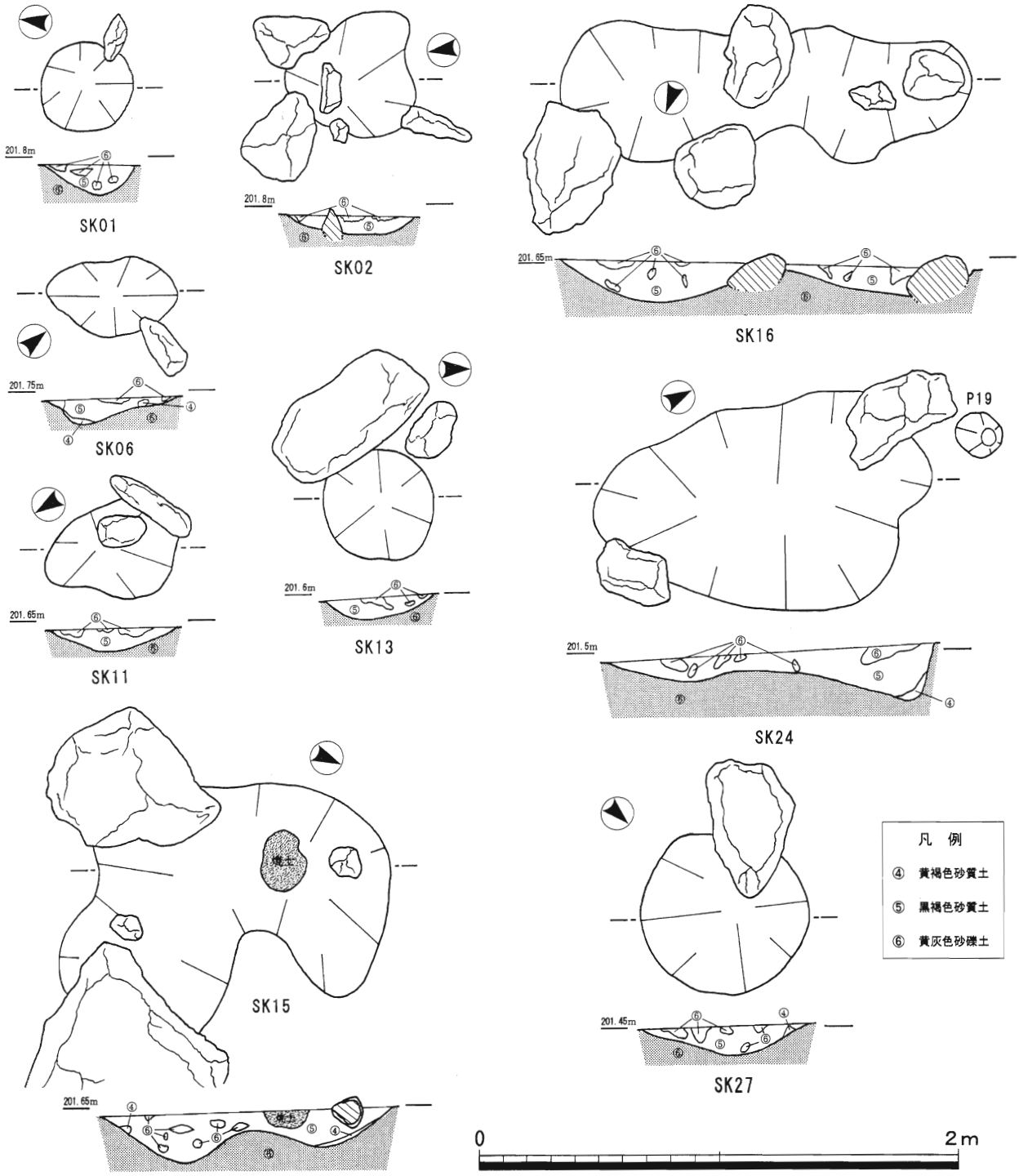


第8図　3地区（下流・中流・上流）の遺構概要図

器や土師質土器などは中・上流地区に出土したが、これは中流地区でいう暗灰色土層を中心に捉えられたもので、上流地区では橙褐色砂質土の３層を主としたものであった（第２表）。

そして縄文期の遺構は、遺物が多出した黒褐色砂質土層では同一層内ということもあってか確認することはできなかったが、下位の黄灰色砂礫土（地山）との層界面に検出され（第８～１０図・第１表・図版４－１～―６・５－１～―６）、なお、中世期の遺物も上位層で出土しているが、これに伴う遺構は把握することができなかったのであった。

第４節　検出遺構



第９図　下流地区の各種の遺構図

1．はじめに

検出した遺構については、ピット（柱穴状）と捉えたものは凡そ径が40cm以下のものとし、Pで略号することにした。またSKと略号した土坑をいうものは、凡そ径が40cm以上を測るものをいうことにし、そして焼土塊域のものは別述するとともに、それは遺構計測表等ではとり扱わないことにした。

これらの遺構の多くは下流地区で検出され、ピット（柱穴）状のもの２７基、土坑として捉えたもの２９基、それに焼土関係の塊土跡の１箇所（第９図・図版５－２）であった。また中流地区では集石を伴った土坑の１基と、そうでないもの２基、そして上流地区では土坑２基しか捉えることができなかった（第８図・９図・第１表）。これは３地区でもいえることであるが、とくに中・上流地区においては、河流（匹見川）のオーバーフロー等によって攪乱的堆積状況であったことから判断して、遺構の大半は失壊されたものか、あるいは強い砂礫・砂質土という体質のために把握することができなかったかのいずれかであろうことは、3地区とも万遍なく遺物が出土しているという状況が証明しているのではないかと考えられる。

2．検出の遺構の概要

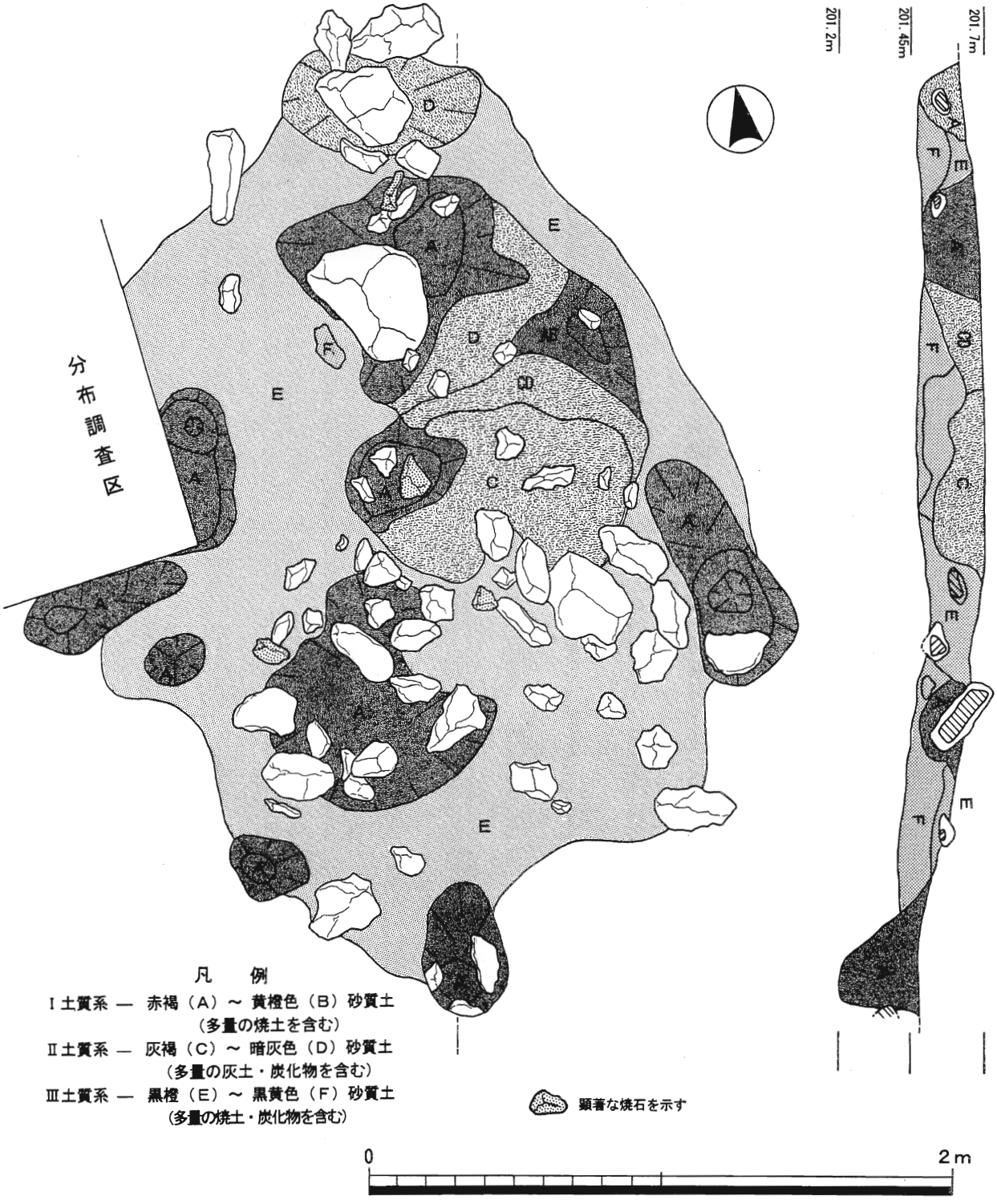
遺構の検出状況　検出した遺構を計測したものは第１表のとおりであったが、総て表出したのは、黒褐色砂質土層と黄灰色砂礫土層（下流・上流地区の５・６層、中流地区の６・７層）との層界面であった。しかしこれらの遺構は、遺物の垂直分布や遺構の形成状況からみて、黒褐色砂質土層中の上位から構築されていたものと想定されるため、したがって原行どおりのものであったとはいえるものではない。

地区名	遺構NO.	短径(cm)	長径(cm)	深さ(cm)	表出面標高(m)	摘　要
下流地区	P01	-	-	3.0	201.780	
	P02	11.0	24.0	6.5	201.765	
	P03	24.0	25.0	21.0	201.770	
	P04	21.0	31.0	7.5	201.775	
	P05	14.0	15.0	5.5	201.775	
	P06	25.0	36.0	7.0	201.770	
	P07	24.0	27.0	-	201.765	縄文土器1点
	P08	13.0	20.0	5.0	201.760	
	P09	25.0	27.0	4.0	201.174	
	P10	15.0	20.0	11.0	201.171	
	P11	13.0	38.0	3.0	201.172	
	P12	16.0	21.0	6.0	201.178	
	P13	14.0	15.0	8.0	201.590	
	P14	23.0	24.0	8.5	201.535	
	P15	32.0	33.0	16.0	201.470	
	P16	21.0	40.0	33.0	201.450	
	P17	18.0	20.0	7.0	201.440	
	P18	20.0	27.0	8.0	201.420	
	P19	18.0	20.0	14.0	201.420	
	P20	13.0	20.0	6.5	201.455	
	P21	26.0	48.0	27.0	201.430	
	P22	17.0	59.0	30.0	201.440	
	P23	13.0	37.0	8.5	201.425	縄文土器1点
	P24	13.0	16.0	6.5	201.435	縄文土器1点
	P25	23.0	26.0	7.0	201.430	
	P26	28.0	30.0	7.0	201.470	
	P27	22.0	30.0	8.0	201.360	
	P28	23.0	27.0	14.0	201.330	
	SK01	36.0	38.0	19.0	201.780	
	SK02	50.0	55.0	8.0	201.750	
	SK03	32.0	45.0	7.5	201.725	

地区名	遺構NO.	短径(cm)	長径(cm)	深さ(cm)	表出面標高(m)	摘　要
下流地区	SK04	31.0	58.0	12.0	201.690	
	SK05	27.0	58.0	9.0	201.770	
	SK06	30.0	53.0	-	201.172	
	SK07	56.0	83.0	17.0	201.171	
	SK08	39.0	67.0	12.0	201.690	
	SK09	27.0	63.0	9.0	201.660	
	SK10	70.0	94.0	12.0	201.630	
	SK11	37.0	56.0	16.0	201.630	
	SK12	50.0	-	21.0	201.590	
	SK13	37.0	-	12.0	201.590	楔形石器1点・縄文土器1点
	SK14	56.0	77.0	28.0	201.550	
	SK15	59.0	145.0	26.0	201.620	縄文土器1点
	SK16	39.0	168.0	10.0	201.570	
	SK17	63.0	-	19.0	201.580	縄文土器1点
	SK18	47.0	-	15.0	201.590	
	SK19	-	-	31.0	201.490	
	SK20	52.0	70.0	11.0	201.580	
	SK21	-	-	18.0	201.500	縄文土器1点
	SK22	62.0	-	59.0	201.470	
	SK23	32.0	56.0	28.0	201.440	
	SK24	83.0	140.0	16.0	201.440	
	SK25	50.0	78.0	12.0	201.410	
	SK26	30.0	46.0	13.0	201.410	
	SK27	65.0	70.0	15.0	201.450	縄文土器5点
	SK28	39.0	57.0	7.0	201.380	
	SK29	-	-	22.0	201.380	縄文土器2点
中流地区	SK01	81.0	97.0	22.0	202.260	炭化物少量
	SK02	77.0	244.0	30.0	202.110	縄文土器5点
	SK03	70.0	193.0	18.0	202.070	
上流地区	SK01	73.0	97.0	13.5	202.221	
	SK02	60.0	120.0	22.0	202.256	

第１表　遺構計測表

遺構のほとんどは黒褐色砂質土が陥入していたが、黄灰色砂礫土がブロック状に嵌入するといった状況も顕著であり（第９図・図版４－４～－６・５－１）、またＳＫ06・ＳＫ15・ＳＫ24などでは、上位層の黄褐色砂質土が陥入するといったものも認められた。ただ砂質性という状況での形成は、坑界面は不明瞭で、また締りも軟弱で捉えにくかったのであった。そういったために、例えば下流地区のＢ区にみられたＳＫ16～22のように、とくに連結系の土坑の切り合い関係においては、把握できなかったというのが実状であった。ただし本遺構群らが溝状に周円していること



第10図　下流地区の焼土関係出土状況図

から、竪穴状の掘り込みは認められなかったものの、形状、または焼土塊域に隣接するという様相からみると、本遺構らは住居址（SI）を形成していた一連のものだったかも知れないと考える（第９図・図版５－３）。

そのほかの遺構群は下流地区を中心に比較的分布していたものの、これらがどのような機能をもち、またどのような連係のもとに構築されていたものなのかなどについては、砂質性といった立地形成の仕方に問題もあってか、具体的にはできなかったのであった。このことは下流地区よりは遡る縄文後期前葉から後葉までの遺物を検出した中・上流地区では特にそうで、遺構の基数がそのことを如実に物語っているといえるだろう。と、はいうものの中流地区のA区のSK01では、上位部に意図的に配したものではないかと思われる土坑が検出されたのである。

SK01（中流地区）　該遺構は径81～91cmを測る楕円を呈したもの(層界部)で、坑内には20～50cmを測る円石7個が填充していたのである（第９図・図版4－3）。それも象徴的に捉えたものかも知れないが、その石体の長軸が中志部に向い合うような様形で集石していたのである。立石といえるものはみられず、また暗褐色砂質土、下位には黄褐色砂質土が陥入した坑内には少量の炭化物が検出されたが、その炭化物が何を意味したものであったかは、他に関連づく遺物がなかったので明らかにはできなかった。そして該坑は暗褐色砂質土の６層上位部から構築された可能性が強いと想定されることからみると、原行のものは優に表出面の径は１m余りに達したものであったのではないかと想像している。

焼土塊域　焼・灰土が集中的に出土した範囲を仮称していうものであるが、本遺構は下流地区のＡ・Ｂ区のほぼ中央部に検出されたものである。その範囲は短径約2.5m、長径3.4mの不整形をしたもので、また最層厚は約28cmを測るものであった。（第８・10図・図版4－1・5－2）。

当範囲には焼石が散見されているとともに、また赤褐色から黄橙色した焼土といえるもの、灰褐色から暗灰色した灰土、そして炭化物による黒橙色から黒黄色を呈した色調とに分けられるものが堆積して形成していたのである。このうち焼土は10箇所を数え、うち３箇所では灰土が連結するといったもみられたものの、他は焼土や炭化物を含んだ黒橙色が囲繞するといったように、堆積形成に違いがみられたのである。これは同一時期に形成されたものではないことを切り合い関係からも判ったことであるが、数次の動移や掘り返しなどによって生じたものと解している。

また時期については、10点の共伴（第２表）した岩田Ⅳ類や突帯文などの出土した土器からみて、晩期初頭から中葉に至る期間に形成されたものだったとみているとともに、本遺構は屋外炉群ではなかったと想定している。

（渡辺）

第４章　出土遺物

第１節　はじめに

１．遺物の採り上げについて

後世の人為層ともいえる１・２層については、地区名や層位を記しただけの採集のみといった方法で行ったが、その下位については総て出土標高を実測するなどの原位置方式で行った。ただし中には層序の読み違いのものも若干あると思われるが、現地調査時に捉えたそのままを集計（第２表など）したものであって、そして後述の見解などは、これを基本資料として捉えたものであることを最初に断っておきたいと思う。

なお炭化物については、顕著なものは地点を押えた上で採集しているが、そうでないものは記録のみとして、積極的には取り扱ってはいない。また、このことは上位層（１～３層）に出土した中世以降の瓦器や陶磁器関係においてもそうで、とくに採り上げて紹介するほどのものがなかったことによるものである。

２．出土遺物の分布と傾向

本遺跡における縄文包含層は、総て暗褐色砂質土（下・上流地区では５層、中流地区では６層）であり、これらに伴う遺構はその下位層にあたる黄灰砂礫土（河床礫）との層界面に検出されている（第３章－第４節）。また、中・上流地区では暗褐色砂質土の上位層から表土にかけて陶磁器や瓦器・土師質などの中世以降の遺物が出土したが、これに伴うと思われる遺構は検出できなかったのである。

これらの出土数については第２表のとおりであるが、総合計は5,740点で、うち5,643点という約98％が縄文遺物であり、これを縄文遺物に限ってみていくと、約88％が土器片数の5,054点であったのである。また石器については総数589点で、石器剥片が396点（黒耀石は除いて）と最も多く、ついで打製石斧が100点を超えて顕著であった。そして、石鏃にいたっては24点と比較的少量であり、石錘は19点が出土していて、そこには立地性が反映されているようにも思われる。なお、少量（石鏃を含め16点）の黒耀石の剥片も出土しているが、いずれも乳白色系の姫島産と思われるもので、これは総て下流地区からのものであったのである。

つぎに遺物から文化期をみると、縄文のものは縄文後期前葉の中津式から晩期後葉の突帯文までのものが出土している。ただし、３地区とも万遍なく一様に出土しているかというとそうではなく、下流地区では後期末のものを最古級として、大半は晩期中葉を主とした突帯文系のものであった。また中・上流地区では後期前葉の中津式系を最古級とするが、ほとんどは後期末から晩期初めの岩田Ⅵ類などの凹線文土器類で、下流地区の突帯文系は僅かであったのである。

このことは中・上流地区から下流地区への移動であったものなのか、もしくは後期末からの生活域の拡散であったものなのかは判らないが、中・上流地区における晩期前葉期の衰退は、仮に該時期に河流によるオーバーフローよる災害によったものとみるならば、存続というよりは下流地区には別集団の来住地であったとも考えられないでもなかろう。それを明確に証拠立てるものは

地区名	区名	層位	打製石斧	打製石斧片	半磨製石斧	磨石	石錘剥片	黒曜石剥片	石鏃	石錐	敲石	横断剥片	加工剥片	剥片	礫	縄文土器	瓦	土師	土師質	陶	須恵器	灰化物	計
下流区	a区	1～2層	2				6									9					6		23
		4 層		1			2								1	6							10
		5 層		1			1		1						3	24							30
	b区	1～2層	1				3	1								11							16
		4 層	1	6			12			1					1	34							55
		5 層	2	5			11			1					2	100							121
	c区	1～2層	1				5	1								28							35
		4 層		1			17	1								48							67
		5 層	5	20			58	12	1	1						936							1033
	bcベルト	1～2層		1												6							7
		3 層	1	2			3									12							18
	共伴遺物	SK12										1				1							2
		SK15														1							1
		SK17														5							5
		SK21														1							1
		SK27														5							5
		SK29														2							2
		P07														1							1
		P23														1							1
		P24														1							1
		焼土A(炉)														10							10
計			13	37			118	15	2	3		1			7	1242					6		1444
中流区	a区	1～2層	1				4						1			38							44
		3 層					4									13							17
		5 層														5							5
		6 層		1			13		1				1	1		87							104
	b区	1～2層					1									6			2				9
		3 層																			21		21
		4 層															1		1		2		4
		5 層	1				3									88							92
		6 層	4	5	1		30		4	1					1	530							576
	c区	1～2層		1												14					10		25
		3 層																					0
		4 層																			1		1
		5 層		1			1									8							10
		6 層	5	1			10								4	131							151
	d区	1～2層					2				1					3					9		15
		5 層	2	2			1									7							12
		6 層					7		1							41							49
	南北トレンチ	1～2層					5									8					7		20
		4 層														16		1	1	1	3	少量	22
		5 層					1									13							14
		6 層	2	1			13									90							106
	東南トレンチ	腐土					1									18							19
		1～2層																			3		3
		5 層		1			10		1							35							47
		6 層	1	2			8									86							97
	共伴遺物	SK01											3									少量	3
		SK02														5							5
計			16	15	1		114		7	1	1		5	1	5	1242	1	1	4	1	56		1471
上流区	a区	腐土					12									100							112
		1～2層					1									7					9		17
		3 層		2			9									14					3		28
		4 層					38		3	1	1				2	229							274
		5 層	2	6			35		5	2					2	1001							1053
	b区	1～2層		1			4									7					1	少量	13
		3 層														5					1	少量	6
		4 層	1	1		1	17							1	1	276							298
		5 層		11			24		1	2					5	543							586
	abベルト	1～2層		1												3							4
		4 層	1	6			7								2	126							142
		5 層					2									113							115
	トレンチⅠ	1～2層					4									1					7		12
		3 層					1									9					1		11
		4 層	1																				1
		5 層					1									17							18
		6 層					4		1							102							107
	トレンチⅡ	1～2層					1									2					4		7
		4 層					1									8					2		11
		5 層					3									1							4
		6 層														6							6
計			5	28		1	164		10	5	1			1	12	2570					28		2825
合 計			34	80	1	1	396	15	19	9	2	1	5	2	24	5054	1	1	4	1	90	(不集計)	5740

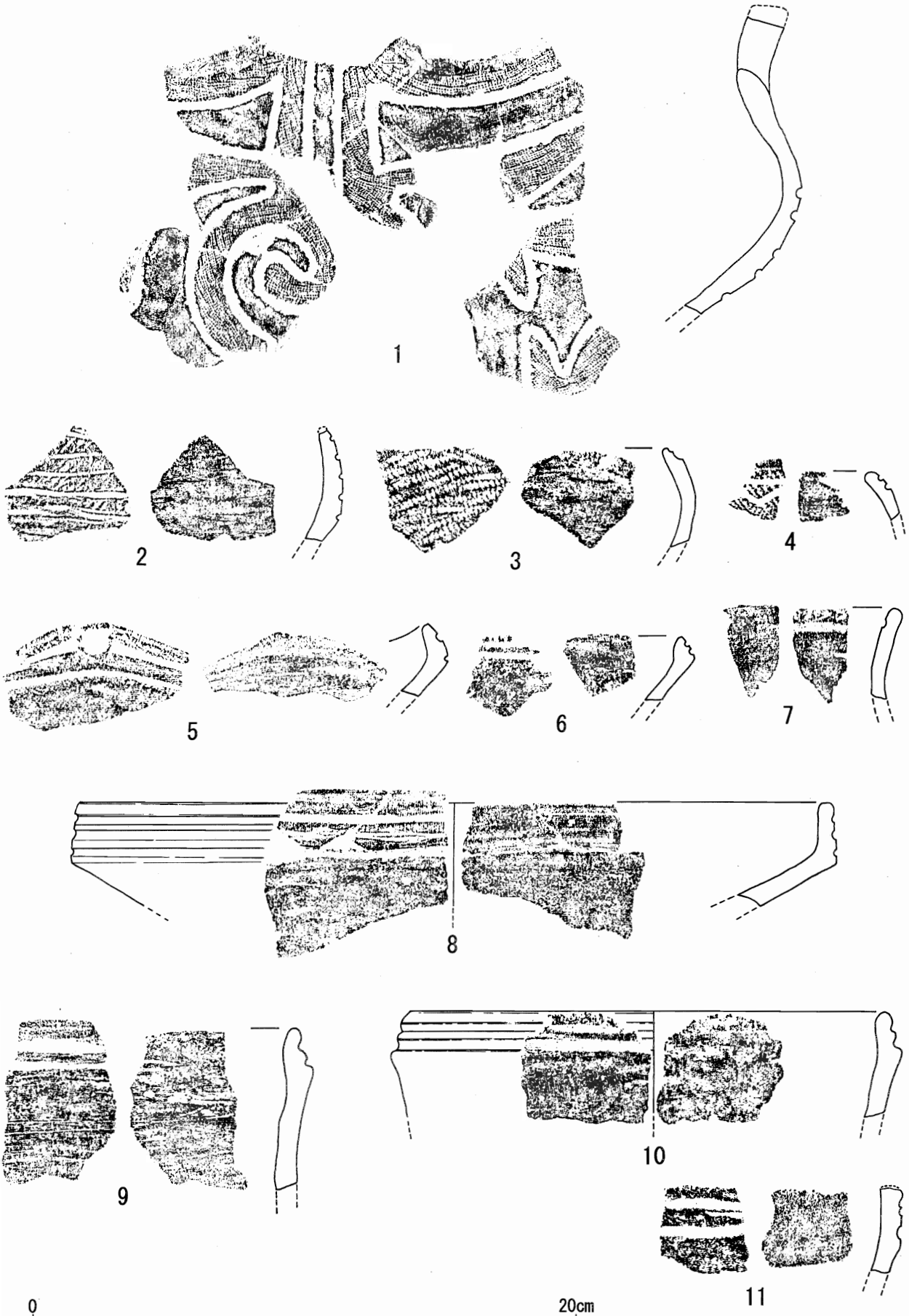
第２表　出土遺物集計表

見当たらないものの、例えば中・上流地区では黒耀石が皆無だったにもかかわらず、下流地区では石鏃を含めて１６点のものが出土したという事実、そして大量の打製石斧の出土といったことも考え合せるならば、後者を肯定する材料であるかも知れないと考えている。

さて後節では、本遺跡の特徴が顕れていると思われるものを、とくに口縁部を中心に抽き出し、以下概説していくことにする。

第２節　実測遺物

１．実測土器（第11～14図・図版６－１～－５）



第１１図　土器実測図（１）

１から６は、中流・上流地区の５層及び６層に出土したもの。このうち１は、中流地区のA区に出土した上半部で、体部は強く内弯するものの、突起部分は外傾する。外面口縁部には窓枠区画、肩部には２本の沈線による渦巻文を施文し、その区画内を磨消し、または巻貝による擬似縄文を施す。調整は篦状具によるミガキで、口縁部は厚く、下半部に向かっては器肉は薄い。内外面とも煤が付着し、胎土は精緻で、色調は褐色を呈する。本遺跡における最も古い時期に位置付けられる中津式系の土器である。

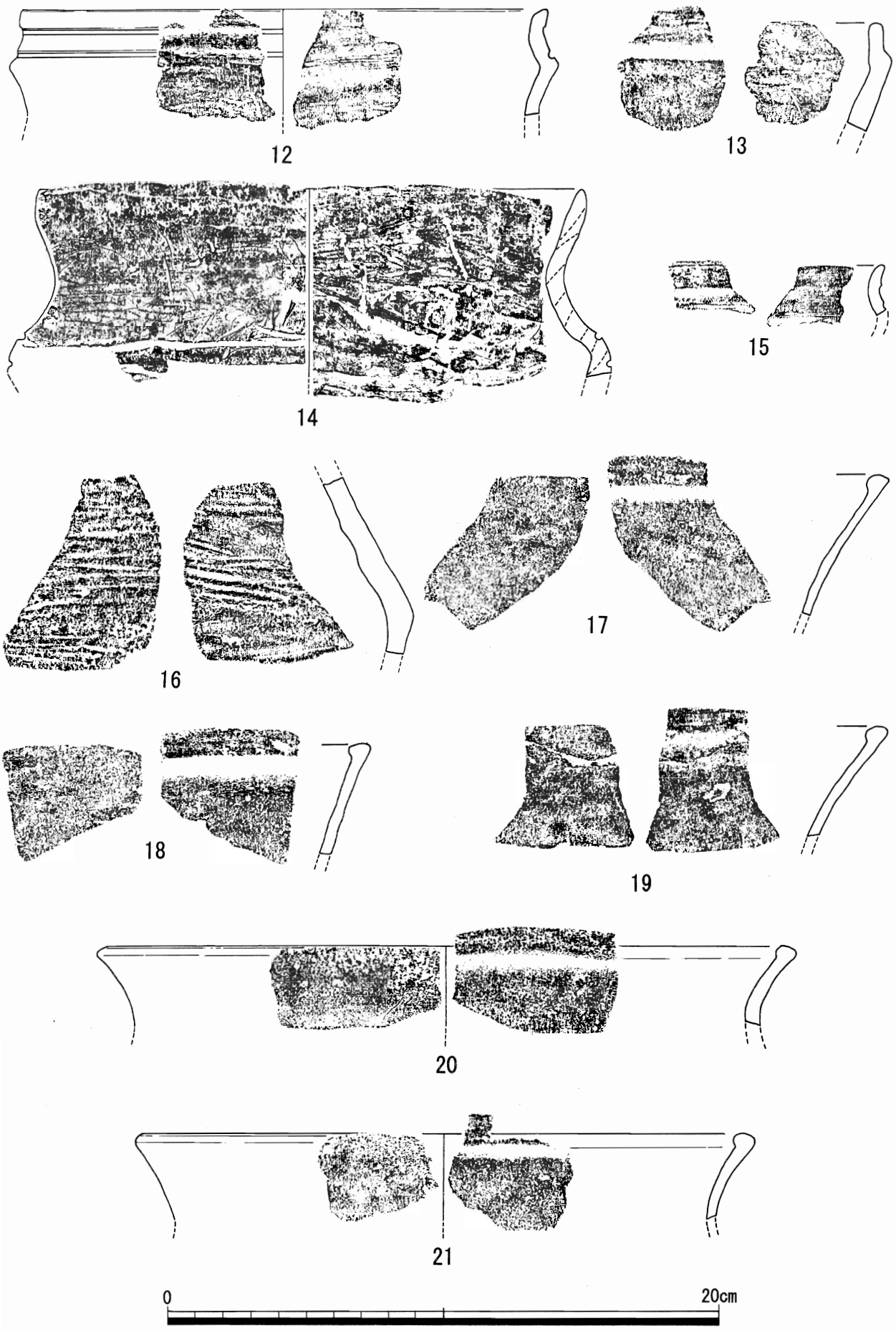
２から７は、後期後葉に位置付けられるもので、このうち２は、条痕地に数条の平行沈線文を施した口縁部で、北久根山式の併行期のものと思われるもの。３は、強く内弯した口縁部で、外面には巻貝による擬似縄文を施文し、内面はナデ調整としたものである。４は、精製の浅鉢系の口縁部。外面には直線、山形文の沈線を描き、その上に巻貝で施文したものである。５は、波状の口縁部で、内外面とも篦状具で整形した後、ナデで調整。外面には２本の併行沈線、波頭部には凹点を施文する。焼成は堅緻で、色調は赤褐色を呈する。６は、外傾して立ちあがり、口縁部は厚みおびて短く内傾するもの。外面口縁部には２本の併行沈線を施し、内外面ともナデで、鳥井原式といえるものであろう。７は、下流地区に出土した口縁部で、外反して立ちあがり、内面の口縁部には刻目、その下部に沈線を施したもの。外面はミガキ、内面はナデ調整。焼成は堅緻で、色調は赤褐色である。おそらく元住吉山Ⅱに比定できるものと思われるもので、下流地区のものでは最も古いと位置付けられるものである。

８から１３は、後期末から晩期初頭にかけての凹線文系のもので、８を除く以外は下流地区から出土したものである。このうち８は、頸部がくの字状に屈折し、口縁部外面に３、４本の凹線文を有するが、下位は沈線的である。外面はミガキ、内面はナデで、色調は橙褐色、焼成は極めて堅緻である。９以下は、屈折が緩い粗製系のもので、うち９は、８と同様に橙褐色を呈する。１０・１１・１２は褐色で、ケズリの後ナデ。１３はミガキで、橙褐色を呈し、焼成は堅緻。凹線が不明瞭であるところをみると、該期の退化期のものといえよう。

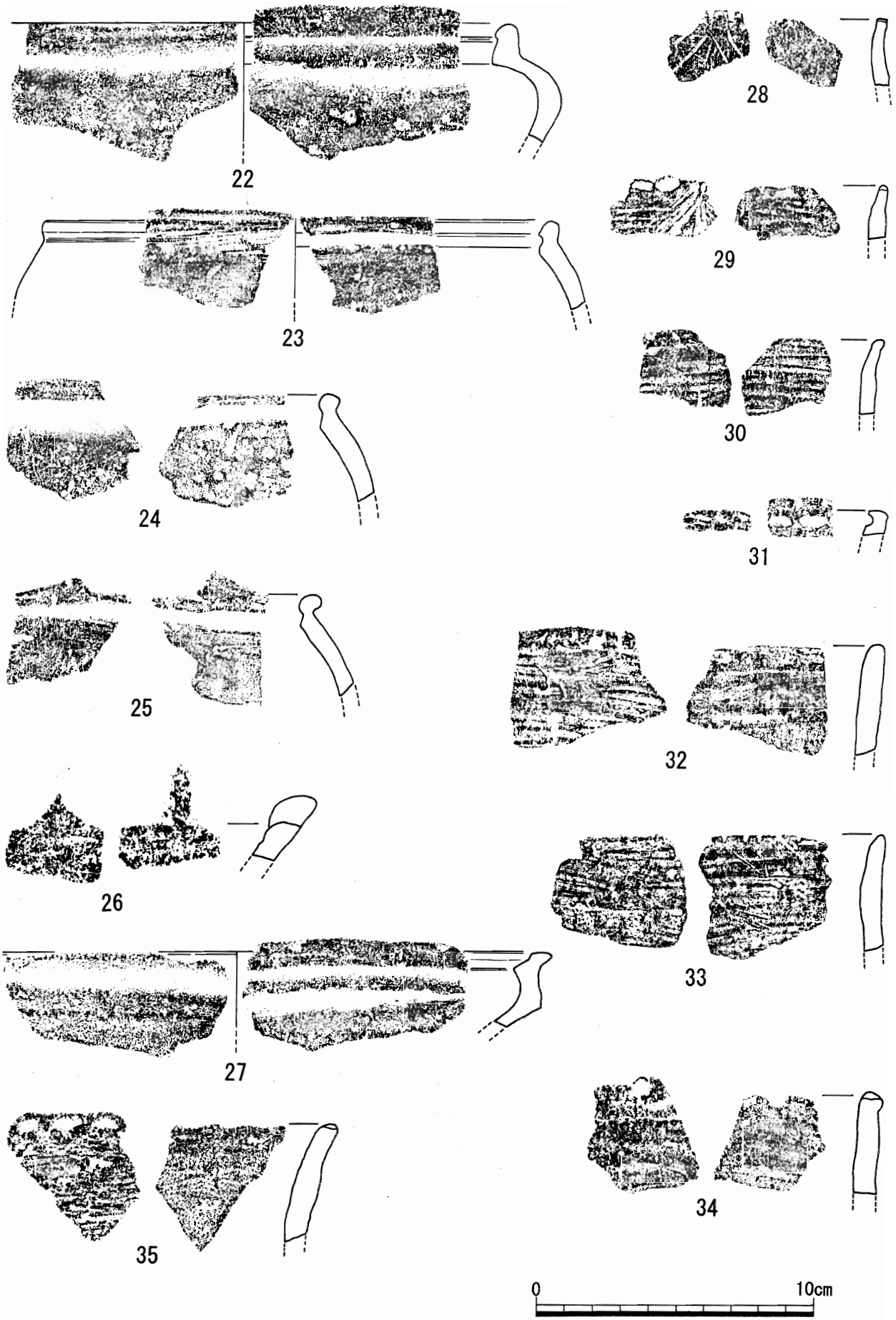
１４は、肩部に沈線を施文したもので、胴部からS形状に屈曲して立ち上がり、口端部は外反する。外面はミガキ、内面はナデ調整である。１５・１６は岩田Ⅵ類に組列するもので、前者はミガキ、後者は巻貝による条痕調整、器壁は薄手といえ、本遺跡では厚手のものは出土していないという傾向がみられる。

１７から２７は、晩期中葉に位置付けられる黒川式系を中心としたものである。このうち１７から１９のものは、逆八形状に立ち上がり、口縁端は内側にP形状をなすもので、ミガキ調整である。２０・２１は、口縁部形態は前述のものとほぼ同一（やや円みおびる）であるが、やや厚手となって頸部は外反するといったもの。調整はミガキで、暗褐色を呈する。２０から２５は、胴部が甕形状に内弯するものの、口縁はΩ形状をなして内面側には鋭角的な凹線状を施しているもの。このうち２２はやや厚手といえるもので、褐色。２３・２４は橙褐色を呈し、焼成・胎土とも極めて堅緻なものといえるもの。そして２６は、リボン突起をもつものである。

２８から３１は、谷尻（船ヶ谷）式に類するもので、そのうち２８・２９は口端部に刻み、外面には山形ふうの細い沈線を施文したもので、前者はナデ、後者は条痕調整である。３１は、内



第１２図　土器実測図（２）

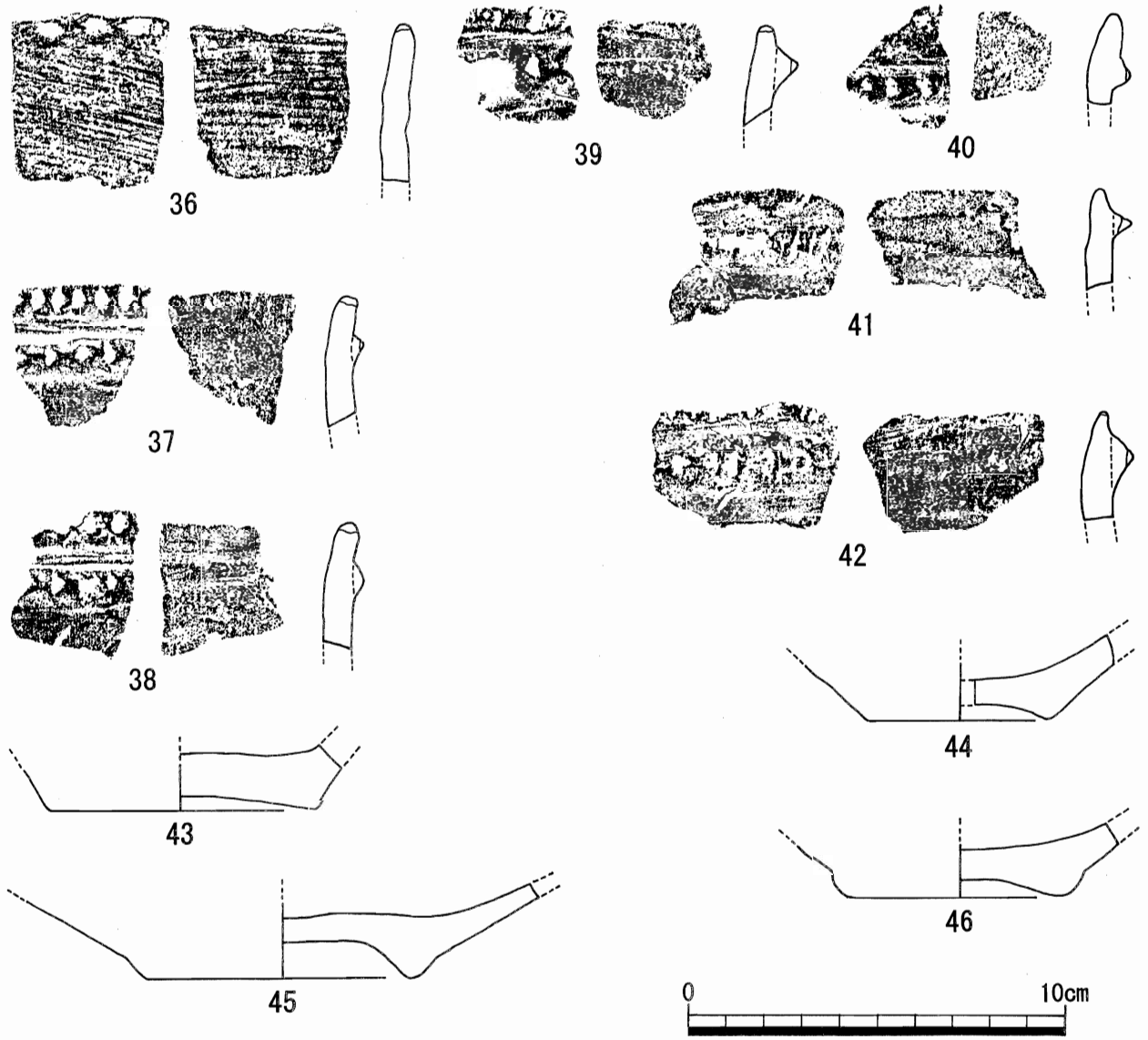


第１３図　土器実測図（３）

外面に刺突状のものを施すが、内面は強い列点ふうに施文したものである。３２から３６は、口端部に刻みを施したもので、突帯文よりやや古手と思われるもの。このうち３２・３３は刻みが細く、３４から３６は押圧の幅広したもので、いずれも調整は条痕である。

３７から４２は、刻目突帯文である。このうち３７から３９・４２のものは口端部と突帯頂部に刻みが施され、４０・４１は突帯頂部のみ。そして３７・３８は突帯がD形、３９は逆D形をなし、４０は貝で刻み、４１はI形状で細い。

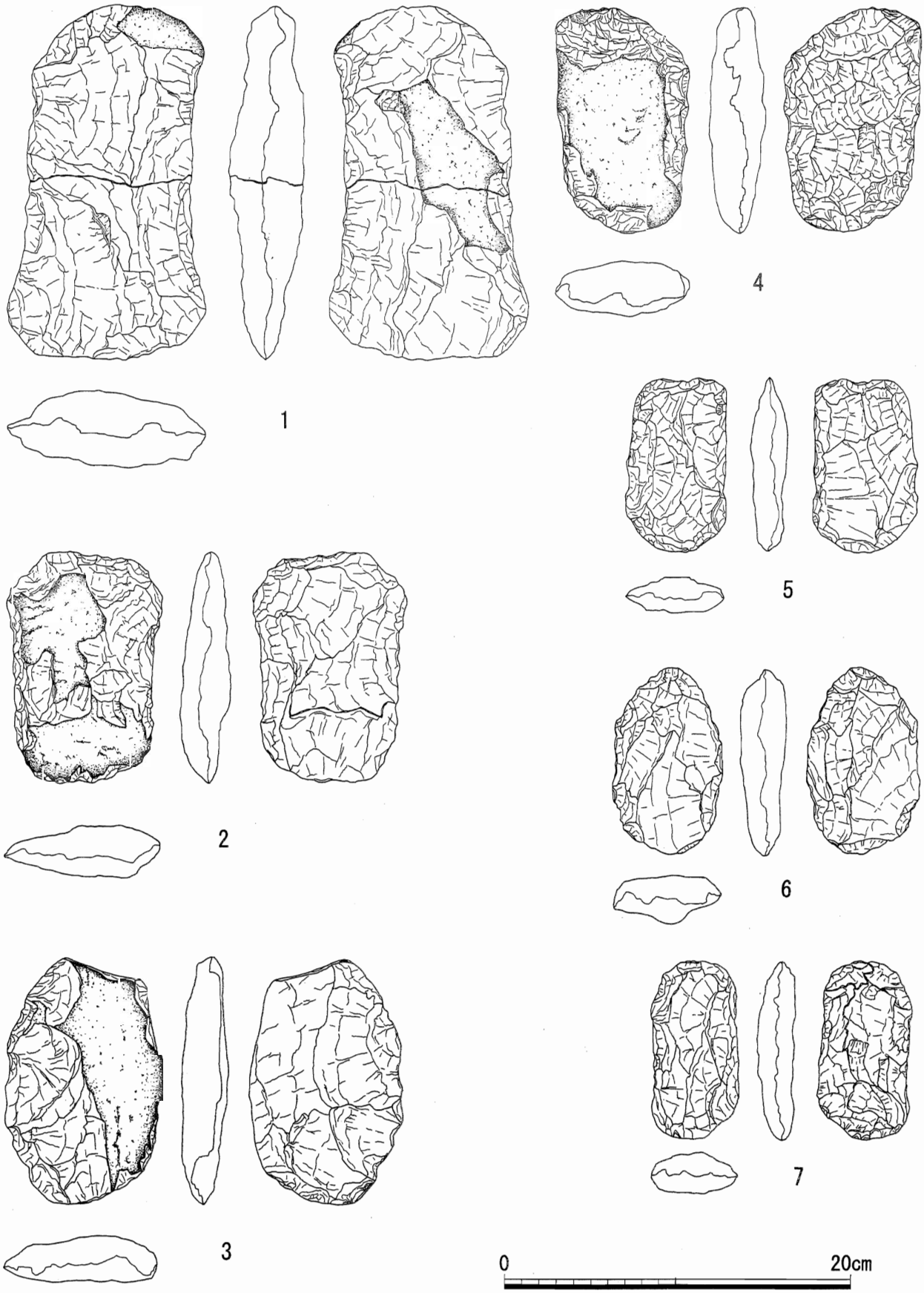
４３から４６は底部で、このうち４３・４４は精製系の浅鉢、４５・４６は粗製系のもの。このうち４３の外面はヘラミガキ、４４はナデ調整である。４５・４６は条痕の後、ナデ調整とし、両者は貼付けで成形されたものである。



第１４図　土器実測図（４）

２．実測石器（第１５・１６図・図版６－４～－５）

１から７は打製石斧で、このうち１は上流地区の４層から出土したもの。石質は凝灰岩で、器面は灰色に腐朽する。器長は約20cm、器幅約10.5cm、厚さ約４cmを測り、そして重さ880ｇを量る本遺跡の出土としては最大なものである。周縁から打撃を加えて粗い剥離で、撥形に整形して

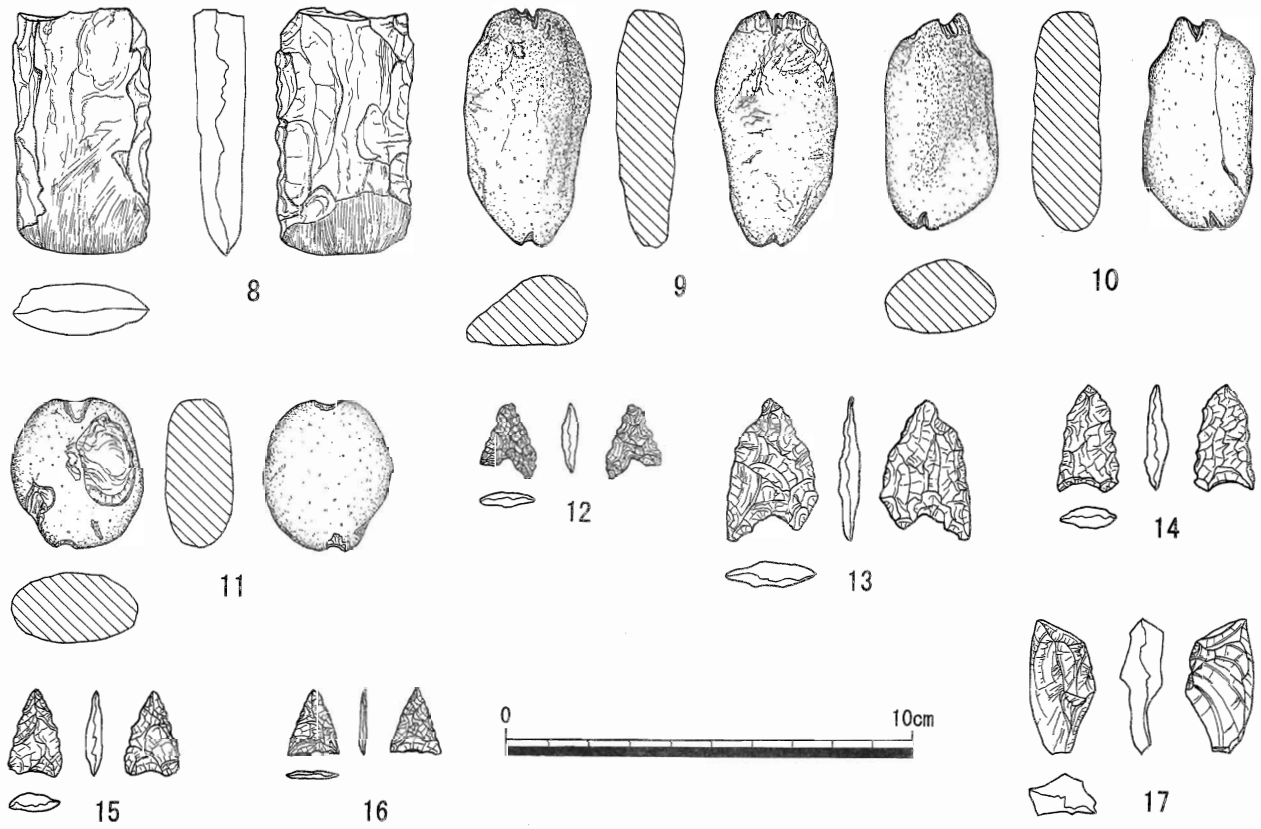


第１５図　石器実測図（１）

腹面側にやや反る。２から４も同じ石質の凝灰岩で、いずれも背面には自然面がのこり、周縁から加撃で整形したもの。５は玄武岩質のもので、青灰色を呈し、器長約10cm、器幅5.8cm、厚さ1.9cm

を測る短冊形といえるもの。７は、器長10.2cm、器幅5.3cm、厚さ約２cmで、重さ142gを量るもの。なお、これらの打製石斧は損欠したものを含め114点出土しているが、４割近くは下流地区から出土したものである。

８は、中流地区の６層に出土した局部磨製石斧。石質は貢岩で、器長約10cm、器幅5.8cm、厚さ約２cmを測る冊短系で、器端部を損欠したものと思われる。貢岩という石質上、側縁からの整形は段状的剥離形をなしており、打製石斧、もしくは石篦状のものからの転用品だったかも知れない。刃面はよく研き磨されてスベスベし、刃縁は弧状を呈して両凸刃形といえるものである。



第１６図　石器実測図（２）

９から１１は石錘で、これらは礫石を転用したもので、両端を打欠いで作用している。石質はいずれも花崗岩系のもので、９は重さ31.7ｇ、１０は31.5ｇを量って長手。１１は25.2ｇ量る楕円形のものである。

１２から１６は無茎系の石鏃で、うち１２は乳白色した黒耀石、以下は安山岩の石質のもの。このうち１３は器長3.4cm、器幅2.2cm、厚さ0.5cmを測り、重さ3.1ｇで大型のものである。剥離は粗く、器形は整ったものとはいえるものではない。１４は、鏃身部が八形状をして長く、基部の抉入は浅い。１５は、腐朽して器面は灰色する。厚さは0.3cmで、器長2.1cm、器幅1.3cmを測るのものとしては、やや厚手なものといえ、そして基部の抉入は浅い。１６は基部が直線的で、三角鏃といえるもの。器長1.6cm、器幅1.3cm、厚さ約0.1cm、重さ0.3ｇの細小的なものである。調整は両面とも丁寧な剥離が施されている。

１７は、黒耀石（乳白色）の剥片で、下流地区の上位層に出土したもの。長さ3.4cm、幅1.3cm、重さ2.9gのもので、二次的な加工はみられない。なお、このような黒耀石剥片は15点出土しているが、中・上流地区では皆無であった。

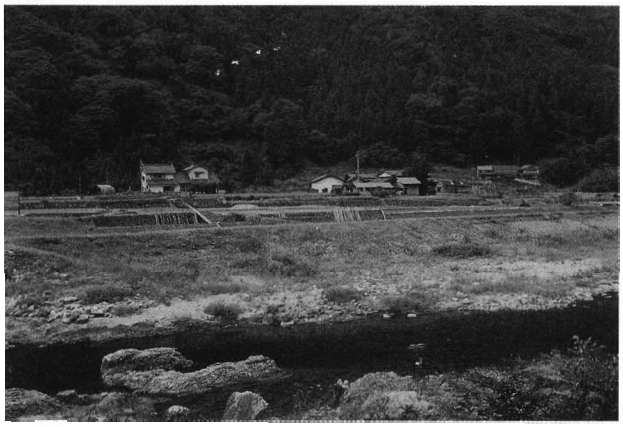
なお、今回の調査では詳細分布調査（平成１４年度）時に出土した石冠（図版６－６）のような呪術具はみられなかった。周知の遺跡である南西側では、他にも円盤型土製品が寺戸淳二氏によって採集されていることからみて、とくに下流地区の南西側から周知遺跡にかけては、そういった呪術的な行為が行われた場所であった可能性があると考えるが、それを明らかにできなかったことは残念である。今回出土したものではないものの、石冠は希品といえるものであることから前書の報告書の一文を紹介して終わることにしたい。

「Ｂ区４層から出土した砂岩質の円礫を素材とする石冠である。高さ6.6m、幅8.7ｃｍ、厚さ7.1ｃｍ、重さ499.7ｇを量る。その表面にはわずかに欠損がみられるものの、半球状を呈する頭部から不整形の基底部、さらにその底面にかけての全面に研磨が施されており、とくに施溝がめぐる頸部と平坦面を成す底面には顕著である。そしてその底面には整形によるものか、あるいは実用・儀礼的行為によって生じたものなのか判然としないもののわずかな擦痕が看取される。」

（渡辺）

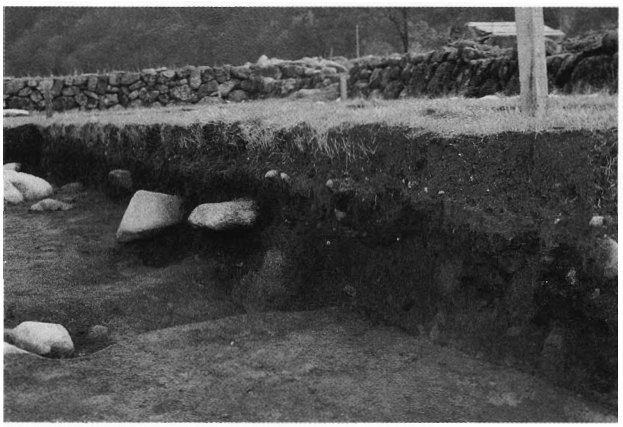
鳥瞰からの遺跡とその周辺風景

図版２

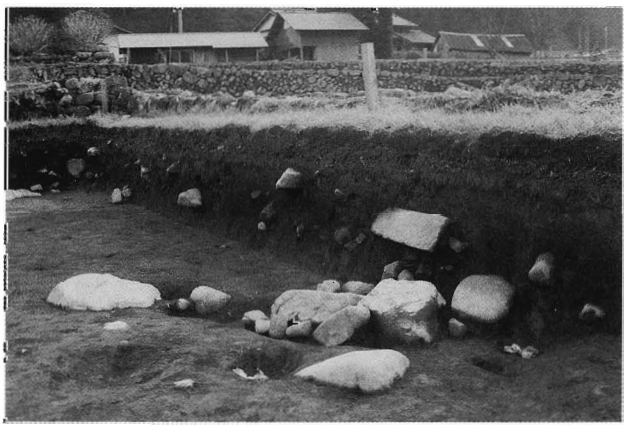


1.匹見川の対岸からみた調査地点（北東から）

2.上流側からみた調査地点（東から）



3.下流地区の土層堆積状況（Ｂ区北北西ベルト）

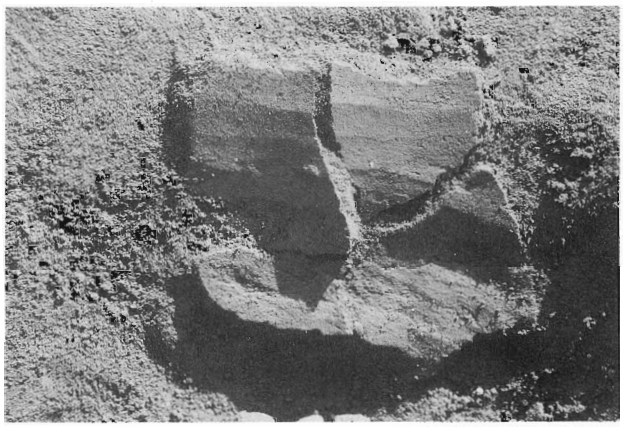


4.下流地区の土層堆積状況（Ｃ区西南西壁）

5.中流地区の南北トレンチ北辺の土層堆積状況（南壁）

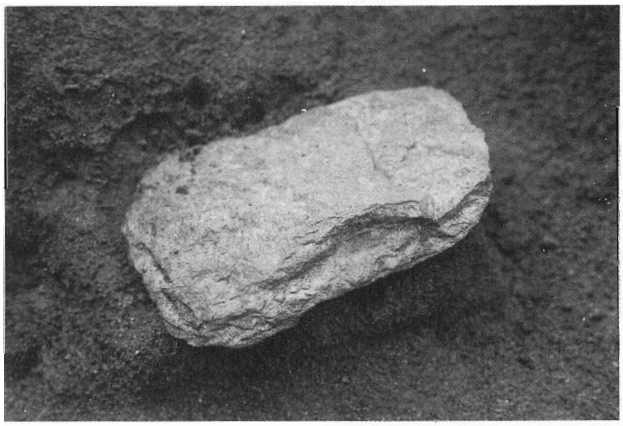
6.上流地区のＢ区土層堆積状況（西壁）

1.下流地区の出土分布状況



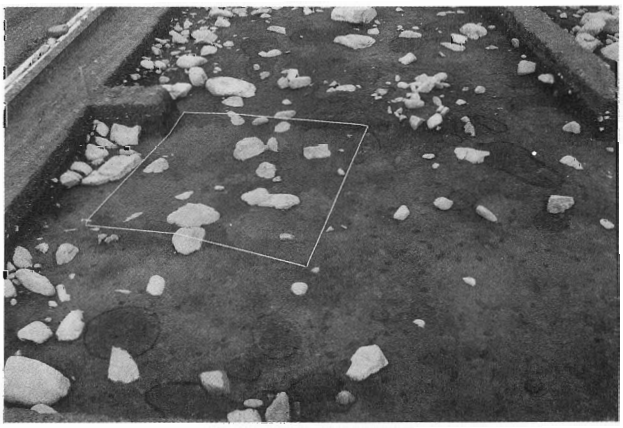
2.縄文土器片の出土状況（下流地区）

3.局部磨製石斧の出土状況（中流地区）



4.打製石斧の出土状況（上流地区）

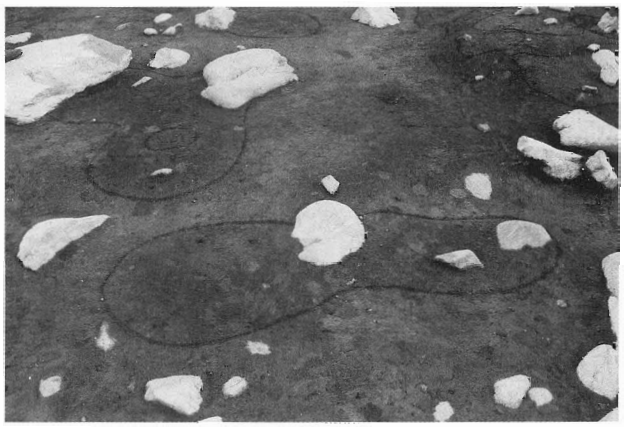
5.下流地区のＡ区の遺構表出状況（東から）



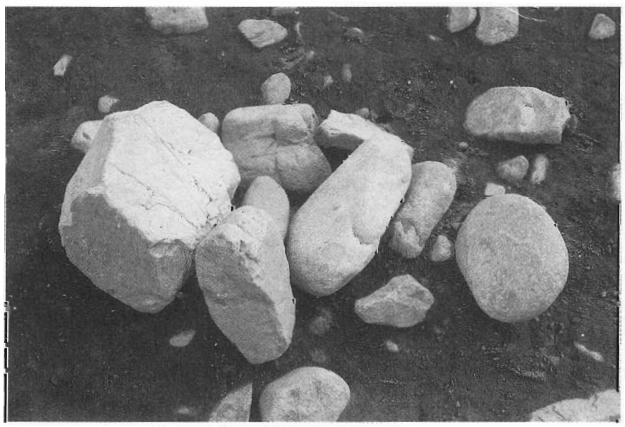
6.下流地区のＢ・Ｃの遺構表出状況（南西から）

図版４

1.下流地区の焼土類の出土状況（西から）

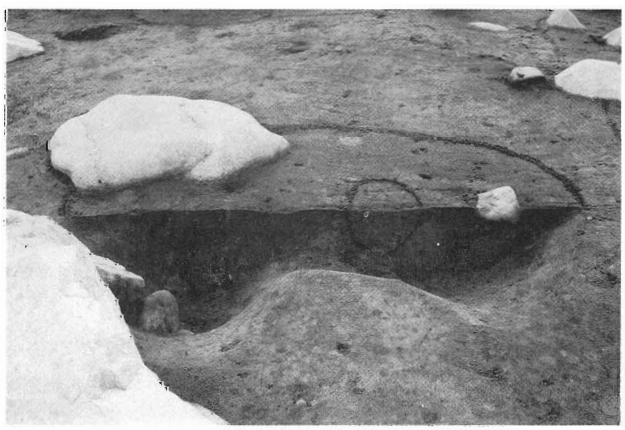


2.ＳＫ15・ＳＫ17土坑の表出状況（下流地区Ｂ区）



3.集石土坑の表出状況（中流地区SK01）

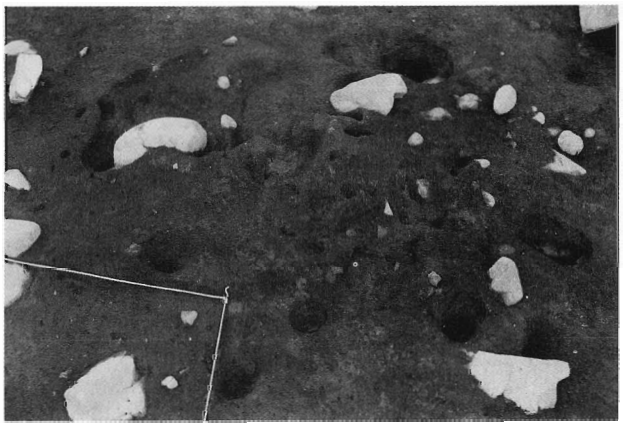
4.北東から据えたＳＫ16土坑の半截状況（下流地区）



5.焼土が嵌入するＳＫ15土坑の半截状況（下地流区）

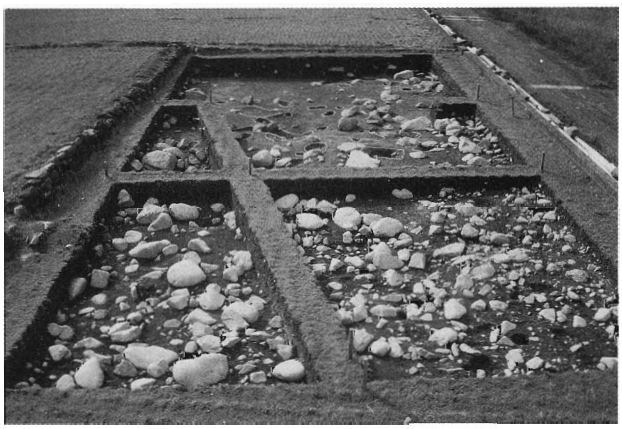
6.ＳＫ24土坑の半截状況（下流地区のＣ区）

1.ＳＫ27土坑の半截状況（下流地区）



2.下流地区の焼土類の完掘状況（南西から）

3.Ｂ・Ｃ区の遺構完掘状況（下流地区）

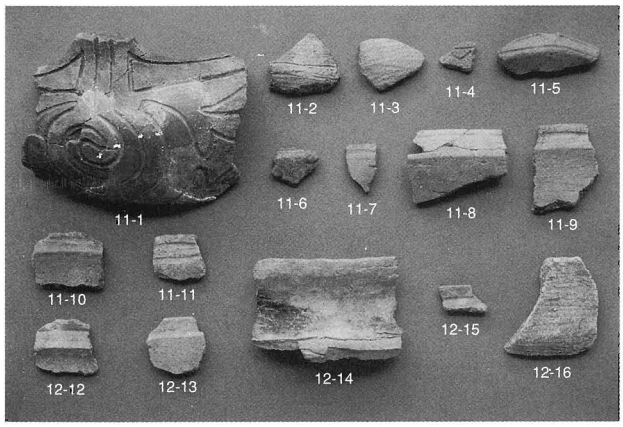


4.下流地区の完掘状況（東から）

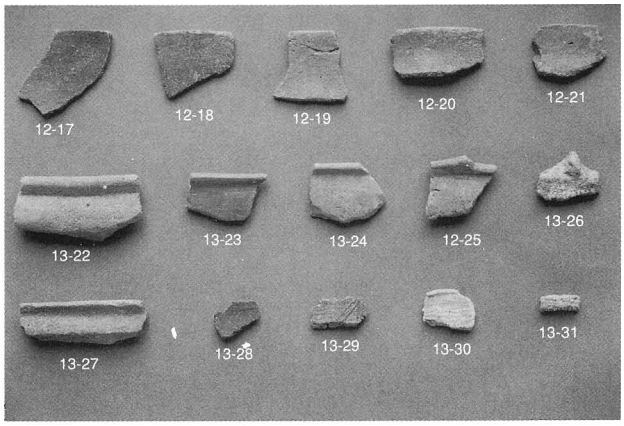
5.中流地区の完掘状況（東から）

6.上流地区の完掘状況（東から）

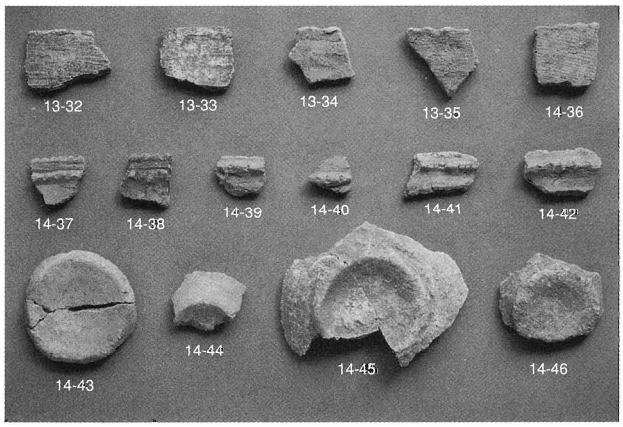
図版 6



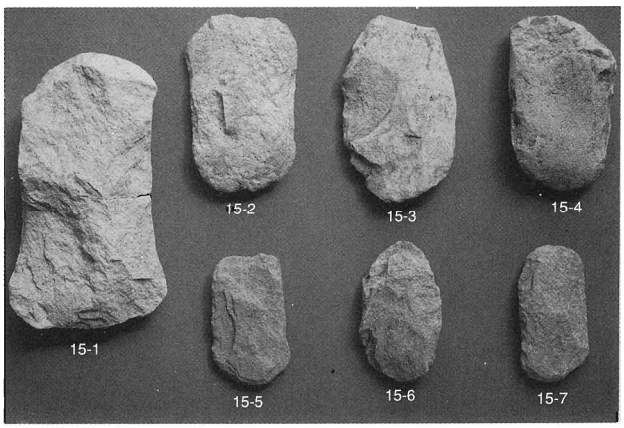
1.実測土器類（1）



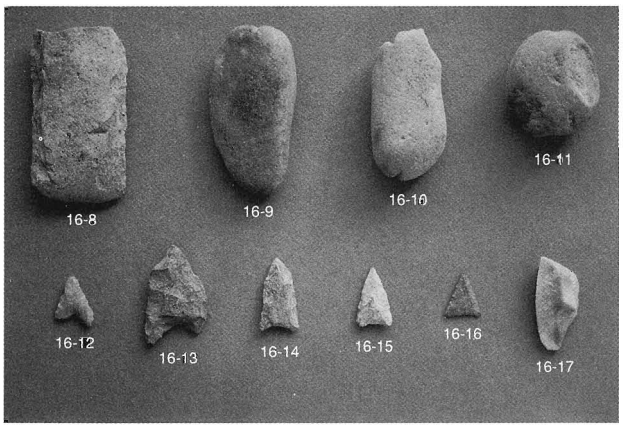
2.実測土器類（2）



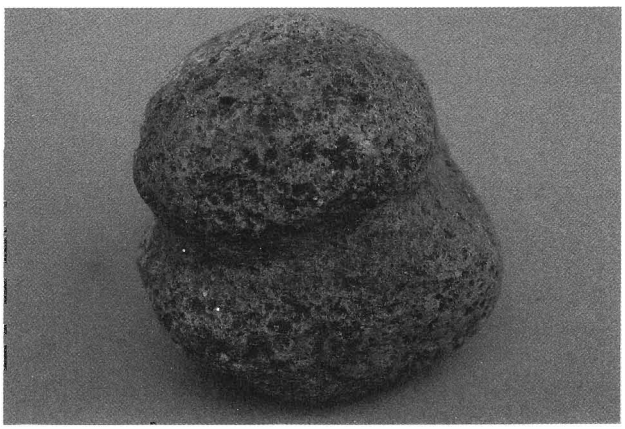
3.実測土器類（3）



4.実測石器類（1）



5.実測石器類（2）



6.分布調査で出土した石冠

平成17年３月10日　印刷
平成17年３月21日　発行

益田市匹見埋蔵文化財調査報告第46集

―中山間地域総合整備事業（益美地区）に伴う―

沖ノ原遺跡調査報告書

発　行　　益田市教育委員会
島根県益田市常盤町１番１号

印　刷　　西　村　印　刷
島根県益田市高津六丁目27番８号